

GATE/サーヴァント 彼の地にて、斯く戦えり

虚空屍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冬木市での文部科学省関連の出向を終え原隊復帰を果たした陸上自衛隊、三等陸尉の伊丹耀司が銀座事件のあと、サーヴァントを連れ特地向と向かう。

* 主人公は転生者ですか？

|| 違います！

* 自衛隊が敵国内に攻め込んでも良いの？

|| 特地向は日本国内だ！ 戦闘OK！

* 帝国が和平交渉を引き延ばしをしたらどうするの？

|| その時は帝都が瓦礫と化すだけだ！

* 大人同士の殺し合いはOK？

|| OK！但し捕虜の扱いは人道的にね

* そこに愛は有るの？

|| ああ、子供には判らない大人の愛があるさ！

* サーヴァントは強いのか？

|| チツ、チートかな……………

どうすれば良いの？ 教えて、偉い人!!

① 二ヶ国の和平条約を結べば無問題

② お互いの愛をひたすら信じよう

③ 無益な殺生を避けましょう

④ 昨日の敵は今日の友。慈悲の心を忘れずに！

⑤ 時にはガツンと敵を痛め付けトラウマを植え付けろ！

自衛官と妻となった稀代の魔術師の大人の愛の物語

目次

接触編

1	お久し振りです、閣下	1
2	伊丹耀司二等陸尉、第三偵察隊の指揮を命ずる！	9
3	メデアは俺のかみさんだ………済まん	18
4	二尉！ 隊列後方に炎龍です！	27
5	鉄の逸物さ！	39
6	よっ、よくぞ参ったな!!………ん？	50
7	これが……これが妾の初陣だと云うのか……	58

接触編

1 お久し振りです、閣下

真夏の暑い土曜の昼前。

この太陽の照り返しも強くアスファルトも溶け出しそうな暑さの中、多くの人々が行き交い賑わう銀座。

そんな人々で溢れかえる銀座の真ん中に突如現れる門。

道を塞ぐ様に現れた門に銀座を歩き交う人々は何事かと思い立ち止まり様子を窺う。通行人の中には映画のプロモーションかと思う者もいる。

すると突然その門の中から人為らざる怪物達が跳び出し銀座を歩き交う人々を辺り構わず蹂躪し始めこの地の平和は破られた。ある者は棍棒で頭を割られ、またある者は上半身を喰い千切られる。そしてまた一人握り潰される……………。

かつては人だった物が、今では只の肉の塊となり其処らかしこに投げ捨てられている。

銀座を歩き交う人々はトロール、ゴブリン、オーク、ドラゴンなど当たり前ではあるが初めて目にする怪物達になす統べなく襲われて殺され、辺りのアスファルトは流れ出た血で赤黒く染まる。

逃げ惑う人々に襲い掛かる怪物の群は宛ら慈悲さなごを持たない津波の様でもある。

怪物達が門を出終えた後には整然と隊伍が組まれた人とおぼしき軍勢が兵馬を進め、怪物達が討ち漏らした生存者を探し、止めを刺しながら更に戦線を押し拡げ始める。正に阿鼻叫喚の地獄である。

その軍勢は銀座中心部の掃討を終え、付近の死体を集め積み上げ骸の山に登りそこに軍旗を立てて声高らかに宣言書を読み上げる司令官。

「我が帝国は皇帝モルト・ソル・アウグスタスの名に於いてこの地の征服と領有を宣言する！」

話は遡る。

伊丹耀司、三十三歳。陸上自衛隊、三等陸尉。

彼は休暇で訪れていた西日本にある冬木市で突如、あり得ない文部科学省への出向命令を受けその地で教鞭を取っていたが、二ヶ月後には原隊への復帰を命じられ市ヶ谷の陸上自衛隊に戻って来た。

東京に戻って直ぐに伊丹はある知り合いに連絡をして面会の日時の調整をして貰い、妻を連れて結婚の報告をしに行く事にする。

この伊丹の知り合いはかなり多忙の身であるが、他でもない伊丹が妻を連れての結婚報告と云う事で様々な予定をキャンセルしてまでも伊丹との面会をスケジュールに振じ込んだのである。

閑静な住宅地の屋敷の門の前でタクシーを降りる伊丹とその妻。

入口脇に居る警護の警察官に本日の面会を告げて敷地内に入ると伊丹の知り合いに付いている秘書がやって来て二人を屋敷内へと案内をし、とある部屋の障子の前で膝を折り中の人物に声を掛ける。

「先生、お見えになりました」

『おうつ松井、入ってもらえ』

松井が障子を開けると部屋の上座には着流しを着た伊丹よりもかなり年配の知り合いが座って待っている。

「久し振りだな、伊丹」

「お久し振りで、閣下」

伊丹が訪れた知り合いとは現与党の国会議員であり政府の閣僚でもある嘉納太郎である。

「先ずは結婚おめでとう、あと原隊復帰もな」

「有り難う御座います。こちらは俺の妻でメディアと言います」

伊丹は隣で馴れない正座をしているメディアを紹介する。

「伊丹の妻、メディアと申します」

頭を下げるメディアに人伝ひとつで伊丹が外国人と結婚した事は聞いていたが、その美しさに嘉納太郎は驚く。

「しかしお前さん達の式に顔を出せなくて済まなかつたな」

「そんな事は気にしないで下さい。閣下が多忙なのは判りますから」

「ちよつと遅くなつちまつたが俺からの祝いだ」

嘉納太郎は懐から封筒を取り出し伊丹の前に差し出す。それは封筒が立つ位の厚みがある。

封筒の中身を察した伊丹は慌てながら嘉納太郎の前に封筒を押し戻す。

「ごつ、こんなに頂けませんよ!」

「おいおい、中身を見てから言つてくれよ。只の新聞紙かも知れないだろ」

再び伊丹の元に渡された封筒の中身を渋々見る。

帯が付いた七桁の論吉の束が伊丹にこんなにちはをしてくる。

「ぐふつ! こんなに頂けませんよ!」

「年上からの祝いは素直に受け取つておくもんだ」

「……………では、有り難く頂きます」

メデイアと二人で深々と頭を下げる。

前以て嘉納太郎が出前を頼んでいた特上の寿司が届き、食べながら会話が進む。

「処で伊丹、お前さん冬木市に居るとき散々な目に遭つたみてえだな」

伊丹は嘉納太郎が聖杯戦争の事を言っていると感じたがまさかとは思いつつそれをはぐらかす。

「散々な目つてなんです?」

「聖杯だよ聖杯。俺が知らねえとでも思つてんのか」

「何で閣下が聖杯戦争を知っているんですか?!」

「なあ伊丹よ。あんな大事おおいを一つの宗教団体で秘匿出来ると思うか?

それこそ国家権力も関わらなきや無理つてえもんだぜ」

あれだけ人が死に物を破壊されているのを警察が不審に思わずにはいないし、かと云つて深くは追求して来ない。確かに警察の捜査が緩いと聖杯戦争中も伊丹も感じてはいた。

「もしかして公安とか内閣情報調査室内調とか動くんですか」

「まあ、参加したお前さんにだから言うがそう云うこつたな」

伊丹は聖杯戦争が60年に一度の厄介な行事として政府に知られている事に驚きを露にする。

「それに聖杯戦争が終わった後も生き残った参加者達には公安が張り付いてるぜ」

「何で残ったマスターに——」

「あれだけの斬った張ったの世界に浸かったんだ。精神が病んだ奴が破壊や殺人衝動に駆られたり、あの儀式を世間に公表しない様にする為だ」

伊丹は嘉納太郎から政府の立場としての言葉に或意味納得する。

「表向きこの世界は魔術とかは認めちゃいねえが政府は把握しているぜ。まあ、官邸と一部省庁の上層部だけなんだがな」

「もしかして政府は過去の聖杯戦争も知っていたんですか!？」

「ああ、明治時代の頃から政府としての公式な記録は残されているぜ。都市伝説みたいだがそうじゃねえ。今までの聖杯戦争に関する資料や報告書は官邸の金庫にしっかりと保管されて引き継ぎがされているってもんだ」

伊丹は昔から政府がその存在を認め秘匿していた事に驚くが、嘉納太郎は話を切り替えた。

「で、お前さんのかみさんはその時召喚した相棒なんだってな。話は聞いているぜ」

そんな事まで知っているとは嘉納太郎の言葉通り公安や内調が動いている事を伊丹は確信する。

「ええ、俺が召喚したのは魔術師のクラスのサーヴァントです。ギリシャ神話でも稀代の魔術師と伝えられてもいるんですよ」

「サーぶあんど?」

「サーヴァントです。使い魔って事で先程言われた相棒ですよ」

嘉納太郎はメディアアに話を振る。

「で、メディアアさん。オタクのこいつのどこに惚れたんだい? まあ、俺も人の事を云えた立場じゃねえんだがな」

「始めは宿を取る為の方便で許嫁としていましたが、日を重ねるに連れ伊丹の優しさに触れた感じが致しました。ええ、その優しさです

「わ」
「惚のろけてくれんなあ。結局伊丹、残ったお前さんは何を願ったんだ？」

聖杯が願望機である事を知っている嘉納太郎は興味に駆られ伊丹に聞きただす。

「メディアが肉体を持つ事ですよ。あとは聖杯の機能停止ですかね」

「何だ!! お前はあれを止めちまったって言うのか!？」

伊丹は何当たり前の事を聞いているのかと思いきやサラリと答えるが、政府関係者としての立場の嘉納太郎が驚き出した。

「えっ? いけませんでしたか?」

「参ったなあ……………いやな、政府も今後あれに一枚噛もうとしていたんだが聖杯はもう出て来ないのか……………」

「ちよつと待つて下さい! 聖杯は人の善し悪しを選びませんよ。勝ち残った者の願望を叶えるだけです。実際、聖杯を人間を間引く為に使おうとした輩も居たんですよ! それに比べれば何て事無いじゃないですか!」

この世を地獄に変える事も出来る聖杯が伊丹の手に渡った事を天に感謝した嘉納太郎。

「世界の危機を救った隠れた英雄って訳か……………英雄様を無下には出来ねえよなあ。なあ伊丹よ、困った事があつたら言ってくれ。世界を救ってくれた礼代わりだ、力になるぜ」

伊丹は分厚い封筒を擦りながら嘉納太郎に話す。

「もうお祝いは頂きましたが——」

「あれは結婚祝いだ! 今言ったのはお前さんが馬鹿な事に聖杯を使わなかった事への礼だよ! お前さんとかみさんの武勇譚を聞かせてくれねえか」

伊丹は休暇を当てて冬木の同人誌即売会に出向いた処から話をし出す。

生の聖杯戦争の話を聞き嘉納太郎は興奮を露にする。

「まあ、お前さんがかみさんと無事に居られたのが何よりだな。その話を内調で話してくんねえか。お前さんの生の語りを記録として残

さにやならんからな。そんなときやあ、追って知らせるよ」

最後に嘉納太郎は伊丹に言つて良いのか悪いのか迷つた挙げ句、話せなかつた事がある。

(なあ伊丹よ、入院中のお袋さんに結婚の報告位してやんな……………)

東京に戻つてからと云う物、メディアはギルガメツシュを連れ都内を回り靈気の集まる所を調べ回り、皇居が一番靈気が集まる所と判り、ちよこちよここと皇居周辺に出掛け出している。

「この靈脈が集まる場所は最高じゃないの！ 本当に良い靈気が集まつているわ！ いざとなつたらここに陣地をつくるわ。ええ、結界を張るわ！ 流石は二千六百年以上続く皇国だわ。」

「メディアさん、もう聖杯戦争有りませんから」

ギルガメツシュの言葉など聴こえないメディアは東京を護り皇居に集まる靈気にただただ感心する。

「天海大僧正は素晴らしい仕事をしたわね。嘗ては徳川幕府を護る為、そして帝都を護り今の東京を魔力の力で護り続けて居るのよ！」

メディアは地図に今までのお詣りをしたお不動、神社仏閣をマークしてそれぞれを線で結んでいくと、皇居を中心とした五芒星や北斗七星の形になる。更には皇居の真北に位置しているのは徳川家康公を神と奉る日光東照宮がある。

「こんなな靈力で首都を護っているのは日本位だわ」

メディアはお詣りをした所に魔術を仕掛け、いつでも魔術結界を張れる様にもしていた。

そんな度々皇居の周辺を散策するメディアとギルガメツシュが周囲の目を惹かない訳がない。

皇宮警備隊の中でも話題にあがっている。

「最近良く見掛ける外人のカップルが居るよな」

「そうそう、良く皇居の周囲を散策して居るな。しかし目立つ二人組だよ」

「ああ、俺は気になって話し掛けたら都内のパワースポットを巡っていて、その靈気が皇居に集まっているって言っていたぞ」
「本当かよ!? しかし珍しいよな、外人さんのパワースポット巡りって」

「俺なんて目が合う度にあの美人さんから会釈えしゃくされるぞ!」
「くっ、羨ましいなお前は!」

ギルガメツシュが伊丹やメデアを『さん』付けで呼ぶにも、彼女の心中の変化があった為である。

聖杯戦争最終戦の前から、伊丹の出退勤を度々待ち伏せしてはサーヴァント替えを仄めかすなど、己がマスターである言峰綺礼よりも伊丹に興味を抱た。

最後の戦いに於ては、瀕死の重症を負ったギルガメツシュの顔を伊丹が判別出来ない程に打擲し、指の骨を一本一本全て折り、放って置いても何れ消え去る敵であるギルガメツシュを『戦いはもう済んだ』との理由で、伊丹がメデアに頼み込んで一番に治癒の魔術を掛けたりして貰った経緯から、伊丹とメデアには恐怖と云うトラウマと、一番に治して貰った恩義を常に感じて一緒に行動を共にしているのである。

こうしてメデアと行動しているギルガメツシュであるが、何もせずふらついて居る訳ではない。

伊丹と共に東京に來た彼は株のデイトレーディングを始めたのである。彼の持つスキル《黄金律》が加わり底値の株がストツプ高に成る程である。

株の売買で纏まった金を得たギルガメツシュは起業をし出す。その社名も《King Of Hero 商事》とされたが、勿論伊丹もメデアもこの胡散臭い会社は何をしている企業かは今は未だ知らされてはいない。

こうしてメデアの皇居巡りとギルガメツシュのデイトレーディングと企業運営は彼等よりどころの拠となる。

そんな平和な日常を過ごす伊丹達。

真夏の暑い土曜の昼前。

新橋駅に伊丹とメデア、そしてギルガメッシュがゆりかもめに乗り換える為に小走りで改札を抜ける。

何かが一瞬、伊丹の視界の端を通る。

伊丹は連絡通路の窓に付いた汚れか何かかと思いきちらに目をやると、信じられない物を視界の中心に捉える。新橋から離れた銀座上空から此方に向かって飛んでくる翼竜である。

（おいおいおいおい！ なんだよありや？ ワイバーンか!? 有り得んだろ!!）

するとメデアが念話で然り気無く答えて来る。

（あらまつ、珍しい。ドラゴンですわね）

その念話にギルガメッシュも加わる。

（伊丹さん、あのドラゴンは雑種に使役されていますよ）

伊丹は目を凝らして観ると確かにドラゴンの上に人らしき物を確認した。

すると伊丹はかなりズレた事を言い出す。

「不味いぞ、本当に不味いぞ！ 夏の同人誌即売会が中止になっちゃうよ！ 寄りによって何でこの日なんだ!!」

悪態をつきながらも尋常ならざる物を見て銀座周辺の状況を想像した伊丹は同人誌即売会が中止になるのを阻止する為、メデアとギルガメッシュを連れ新橋の交番に居る警察官に陸上自衛官の身分証を見せ二重橋の攻防に身を投じるのである。

後に二重橋の英雄として全世界に名前が知れ渡る事を今の彼は知る由もない。

2 伊丹耀司二等陸尉、第三偵察隊の指揮を命ずる！

半蔵門前に集まる避難民。しかし半蔵門が開けられない限り彼等はここで異界の軍勢に蹂躪され想像が着かない程の犠牲者を更に増やす事になる。

「だーかーらー、民間人を半蔵門から皇居に入れて反対側から逃がせば良いでしょうがぁー！」

伊丹は半蔵門の皇宮警備隊の詰所に駆け込み、溢れ出す民間人の避難誘導の仕方を話し出す。

二重橋に集まりつつある異界の軍隊には攻城の為の投石機や城門鎧を乗せた木甲車まで見て取れる。

この惨状に観るに見兼ねたメデアとギルガメッシュが動き出す。

（ 耀司様！ このままでは民間人の犠牲者が増えますので増援が来るまでギルと一緒に暴れさせて頂きますわ ）

（ この状況じゃ仕方が無いな、頼んだぞメデア ）

メデアは蝶のごとく浮遊をして纏わせた円環からビームを竜騎兵へと浴びせ掛け次々と落としていく。地上にいる敵兵士群には直径数メートルのヘカティック・グライアーを放ち異界の軍勢をことごとく消し炭に変えていく。

しかも戦う場所は霊気が集まる皇居で有る為、宝具級の攻撃を放つても魔力の事を考えずに次々と放てる。

（ やはり私が見込んだ霊地。魔力全開で撃ち放題なんて快感ですわ ）

ギルガメッシュはメデアから送られる情報を元に何処に槍剣を射出をすれば良いのか指示を受けて自らの背後の空間から数多の槍剣を浮かび上がらせ雨あれと攻撃を仕掛ける。

「フンッ、異界の雑種が………我に平伏せよ」

こうして増援が来るまでの間、メデアとギルガメッシュは奮戦をする。

しかしこの大活躍が一般人の携帯動画で録られたりしたが、後日政府はインターネットに上げられた動画を全てチェックし、鮮明に録ら

れている物は削除対象として公開出来ない処置をし、鮮明でない物のみ暈しを入れ公開させ、自衛隊や警察のドローンであるとして公表せざるを得なかった。

半蔵門にいる皇宮警備隊の警部は皇居の住人の上の方から半蔵門の解放と皇居内での籠城を認められ、開け放たれた半蔵門に避難して来た民間人が我先にと殺到するが、指揮の系統から外れた警察官や有志の民間人が避難の誘導に当たり大きな混乱も無く粛々と避難が始まる。

作戦指揮所となった半蔵門脇の詰め所の伊丹の元に傍の警視庁から機動隊の増援や市ヶ谷から来る陸上自衛隊の情報が入りだす。

異界の軍勢は狭い二重橋で身動きが取れない程に詰め寄せ退く事が出来ない程に集中しだす。それでも城門鎚で門を突いたり、投石機で大きな石樽を投げ込んで来る。

警察官の拳銃や催涙弾等の装備では敵を撃退する迄には至らない。しかし彼等警察官は民間人に被害が出ない様に精一杯粘っている。

そこに警視庁から機動隊の増援が、更には市ヶ谷から攻撃ヘリのAH-64D アパッチ・ロングボウが駆けつけワイバーンに銃撃を浴びせまくり次々と敵の竜騎兵を落としていく。

アパッチ・ロングボウが攻撃をするに当り未確認の浮遊物体があり、それはさながら民間人を守り敵軍に矛先を向けている事が明白な為、メディアに流れ弾が当たらない様に攻撃をしていた。

装輪装甲車で現地に到着し出した市ヶ谷からの陸上自衛隊は迫り来る敵軍に雨あられと銃弾や擲弾を撃ち込む。次々と倒れていく敵軍は隊伍を乱し崩れ始める。今まで防戦一方だった機動隊か催涙弾を撃ち込み、『検挙！』の一声で一斉に前に進みだし敵軍の兵士を捕まえ始める。

圧倒的な火力の戦力差の前に隊伍を崩され敗残の兵となった異界の軍勢はゲートの中へと退いて行ったのである。

銀座事件の後、北条重則総理は国会で日本と異世界は門で繋がれた

陸続きの土地のため日本国内と定義をし、今回の異世界からの侵略者に対してその責任者を逮捕し賠償を求める為に自衛隊を門の中に派遣をする特別地域自衛隊派遣特別法案を提出した。

一部左派系野党からの反対があったが法案は衆・参議院ともに可決され特地向の自衛隊派遣が決定された。

異世界からの侵略者により憲法九条は日本を侵略してくる相手には全く意味を持たない事も当然の事ながら露呈し、今まで憲法九条をお題目の様に唱えていた左派系野党はその支持率を大きく失う事となる。

そして伊丹は二重橋で民間人を救った英雄として防衛大臣から賞詞を受け二尉へと昇進をした。

そんな伊丹は特地向派遣隊の第一陣として門を潜る事になる。

「耀司様、私達をお連れになつては下さらないのですか!」

「聴けば何が居るかも解らない蛮地向向かわれるなど……………どうか私も帯同させて頂きたい!」

「駄目だ駄目だ、二人とも! 自衛官でもないし連れて行ける訳ないだろ。無理言うなよ!」

行かせろ、無理だの押し問答の挙げ句、伊丹は少し考え出し、徐に携帯を取り出しある人物に電話をする。

本人が出ない為、留守伝に用件を残し電話を切った。

待つ事数時間、件の相手からのコールバックが掛かる。嘉納太郎である。

『わりいなあ伊丹、待たせちゃまって。二尉に昇進おめでとう』

「いえ、有り難う御座います。それにこちらこそ突然に済みません!」

『で、お前さんの用件って何だ?』

伊丹は先ず自身の特地向行きを切り出す。

「閣下は俺が特地向派遣隊なのはご存知ですか?」

『ああ、名簿にお前さんの名前があつたよな』

暫し言い淀む伊丹であるが思い切つて話の本題を切り出す。
「……………うちのかみさんとサーヴァントのもう一人が連れて行けて……………」

『はあ〜？……………』

とんでもない伊丹からの電話に暫し考え込む嘉納太郎。すると突然話を切り換える。

『そう云やあ観たぜ、公安が録っていた二重橋での映像。お前さんの奥さん大活躍だったな。それともう一人も頑張っていたよな。そいつかい？』

「はい、ギルガメツシュといます」

『う〜ん……………』

またまた電話口で悩む嘉納太郎。

『……………解った。二人の件は防衛大臣の俺が直々に体裁を整えてやる。これで以前の約束はチャラだぜ』

「有り難う御座います、閣下！」

『但しだ、身の安全までは保証できんぞ』

「その点はご心配なく。俺より頑丈ですから」

こうしてメデイアとギルガメツシュは防衛大臣直轄の特別任務をもつ肩書きが与えられ伊丹と共に特地向へと赴く事になった。

銀座の門の前に整然と並ぶ特地向派遣隊隊員。その中にはメデイアとギルガメツシュも紛れている。

本位慎三総理による出陣式の後、派遣隊は74式戦車を先頭に派遣隊員を乗せた装輪装甲車が門の中を通り特地向へと向かう。

門を潜り抜けた派遣隊が見たものは夜ではあるが辺り一面に草が茂る丘陵であり、門は丘の頂きに存在している。銀座とは全く異なる風景。予め調査をして地形を把握してはいたが改めて見てみると異世界に來た事を実感する伊丹。

（とうとう來ちまったんだなあ）

すると先頭の74式戦車から敵襲の報せがあり、装輪装甲車から隊員達が即座に後部ランプから下車し部隊を展開させる。

「敵さん待っていたんだ、ご苦労なこった」

愚痴る伊丹もメデイアとギルガメツシュを連れて下車するとメデ

イアは人目の着かない所から浮遊を始め辺り一面を見回す。

「この丘は霊脈集まりし地つて所かしら。合格点だわ」

（メデイアもギルも手を出すなよ。或意味敵の強さを計る為での戦闘でもるからな）

伊丹からの注文にメデイアは悔しがる。

（あらか残念。またヘカティック・グライアーを打ち込んで差し上げようと思っていましたのに）

（今はあの荷電粒子砲みたいな奴は勘弁だな）

丘の麓には帝国軍が焚いた松明が無数に見え隊伍を組んで向かって来るのが見て取れる。

展開を終えた74式戦車と普通科の隊員達は今か今かと攻撃命令を待っている。74式戦車の主砲有効射程に帝国軍が差し掛かった時にその主砲が火を吹く。

それでもかい潜って来る帝国兵士もいる為、普通科の隊員達の小銃が火を吹き迫り来る帝国兵士をなぎ倒して行く。まさに一方的な蹂躪である。

こうしてアルヌスの丘は血に染まって行く。

この一戦を観ていたギルガメッシュは現代戦の用兵や戦術に興味を持ち出す。

帝国兵士の六割を失う事となった今回の出征で帝国の元老院では皇帝に対し責任の追求と今後の兵力の回復の議題を持ち出す。武断政治を行ってきた帝国にとり、この壊滅的な戦力の減衰は周辺諸国に対する帝国の立場を危うくさせる。

しかも自衛隊の逆侵攻により帝国内の門周辺の聖地アルヌスの丘を占領され未だ奪還の目処が立っていない。

「失態でございしましたな、陛下」

カーゼル侯爵はモルト皇帝に詰め寄る。

それに対しモルト皇帝は

「百戦して百勝ともいかぬまい」

と言い、将官の責任のみならず己が責任の所在を曖昧にした。

しかしアルヌスの丘を奪還しようとし撃退され生還した元老院将官の中には今まで見たこともない武器を魔導によるものと捉え、その破壊力に警戒を抱く。

帝国の威信を掛け門周辺のアルヌスの丘を取り戻さねばならないが兵員が揃えられない今、モルト皇帝はある決定を下す。

帝国や属州、そして緒王国があるファルマート大陸から侵攻勢力の一掃の為、周辺国や属国に援軍要請をして『連合緒王国軍』の召集を決めた。

門から侵攻して二日で撤退を開始し七日後にはアルヌス周辺から駆逐された状況にも関わらず兵馬を進めるモルト皇帝にカーゼル侯爵は言上する。

「陛下、アルヌスの麓は人馬の軀へむくろで埋まりましたようぞ？」

召集を掛けられた連合緒王国軍はファルマート大陸を守ると云う大義名分で集められた帝国の属国や周辺国二十一ヶ国からなる十万を動員した軍隊である。それが今、アルヌスの丘が一望出来る所に集まり宿営地を作る。

この宿営場所は彼等が今まで戦って来た経験から弾き出された敵との距離を置いてのものである。それは弓弩や魔導攻撃の射程距離、騎馬隊の脚の速さなどである。

本陣には顔見知った各国の王達が集まり雑談に華が咲く。

「おお、デユラン殿」

「これはリイグウ殿」

エルベ藩王国のデユラン王とリイグウ公国のリイグウ公王は隣国の仲であり、そのリイグウ公王が気軽に話し掛ける。

「この度の戦い、連合緒王国軍は三十万を号しており鎧袖一触ですな」本陣には各王国の王が一堂に介しているが連合緒王国軍を招集した帝国の司令官が現れない。暫くすると帝国の伝令が到着し、帝国軍は丘の敵と対峙している為、司令官が離れられないと各王に伝え去つ

ていく。

この帝国の司令官不在に善からぬ怪しさを感じるエルベ藩王国のデュラン王。しかし他の王達は三十万を号する兵力を揃え皆が樂觀的である。

アルヌスの丘に陣取る敵兵は多く見ても一万足らず。しかも丘の斜面に豪を掘っただけの簡易な防御陣地。その様な敵に対しデュラン王は何故皇帝が連合緒王国軍を集めたのかを考え始めた。

（おかしい。皇帝は何を考えている……………）

日の出と共に隊伍を組む連合緒王国軍。そこで目にしたのは敵の簡易な陣しか見えない丘。丘に居る筈の帝国軍の姿が全く見えない。

そして丘の麓で隊伍を組んで前進をしようとしているのは連合緒王国軍の前衛を名乗り出た三王国、アルグナ王国軍、ムドウワン王国軍、リイグウ公国軍である。

帝国側の言っている状況と違う事にリイグウ公王は怒鳴る。

「帝国軍は何処に居るのだ!？」

アルヌスの丘の麓に各王国の軍勢が隊伍を組んで丘の頂きに向かい前進を始めた途端、爆音と共に兵達が吹き飛ばされて行く。

彼等の感覚では未だ敵の射程外なのであるが、自衛隊側からすると既に敵はキルゾーンに入って居るのである。

亀甲陣を組むが全く意味を持たない。亀甲陣を組もうが組むまいが榴弾砲が大地もろとも吹き飛ばし将兵の身体は四散していく。

目の前の光景に驚愕するデュラン王。

「なっ、なんとっ! アルヌスの丘が噴火しとるのか!？」

竜騎兵をもつてしても丘の頂きには近付けない。次々と対空機関砲で撃ち落とされていく。

この日の戦いは特科隊の一度の一斉射の砲撃を受けた連合緒王国軍の前衛が全滅し終了した。

二日目の攻撃でも帝国軍不在のまま連合緒王国軍の攻撃が始まるが、自衛隊には肉薄出来ず悪戯に兵を失うばかりであった。

もはや連合緒王国軍とは云え無くなる程に数少なくなった兵力に

残った王達が撤兵すべきとの発言をするが、冥府へと散って行った諸国の王達と兵達の無念を晴らすまでは退く事はしないとデュラン王は言い放つ。

後詰めとして最後まで残っていたデュラン王麾下のエルベ藩王国は未だ健在である。

「夜襲じゃ、これなら敵に気付かれずに肉薄できるぞ！」

残ったデュラン王と他の王達は兵を纏め隊伍を組み物音を立てず静かに軍を進める。

暗視装置で連合緒王国軍の動きを把握している自衛隊は敵を十分に引き付け幾つもの照明弾を放つ。

すると突然辺りが昼間の様に明るくなり危機を察したデュラン王は全軍に突撃命令を下し、自身も馬での突撃をするが、防衛ラインに張られている鉄条網にデュランや他の兵が絡み先には進めない。

彼は自らの軍勢がただただ銃弾に倒れ、砲弾により吹き飛ばされるのを目の当たりにしているしかなかった。

進退極まったデュランの付近にとうとう砲弾が炸裂し、彼は吹き飛ば宙を舞い意識を失ってしまう。

翌朝日が昇り、昨晚戦場となった屍が累々とする丘陵を敵国の負傷兵探しがてら彷徨く伊丹とメディア、そしてギルガメッシュ。

「よくもまあこんなに……………銀座の時と合わせて十二万人の戦死者だろ……………」

伊丹の話に異を唱えるメディアとギルガメッシュ。

「私やギルにはこの現状、何故ここまで戦うか解る様な気がします」「そうです。自衛隊側は現代戦ですがこの蛮地の将兵には古いですがこの戦い方なのです。損耗率とかの数字ではなく情で動きますよ。昨晚も散って逝った仲間の為に退くよりは敵に一矢報いたいと考えた敵将が恐らく居たのでしよう」

伊丹はそんな上官の下では戦いたく無いし、部下にもそれを押し付けたくは無いと呟く。

「そんなもんなのかねえ……………嫌だ嫌だ」

上官の檜垣三佐から呼び出しを受けた伊丹は自衛隊が特地内の更なる調査をする事を聞かされる。

「はあ、調査ですか。良いですね」

他人事の様子に答える伊丹は何故自分がここに呼ばれたかなど考えてはいない。

「君が行くんだ!」

「俺一人ですか?」

「違うつ!」 深部情報偵察隊を六個編成して、その内の一つを君が指揮をするんだつ!」

伊丹はやつと呼ばれた訳を理解する。檜垣三佐は今後の活動に協力して貰える様に現地民と友好関係を持てる様にせよとも伊丹に釘を刺し話を繋ぐ。

「伊丹耀司二等陸尉、第三偵察隊の指揮を命ずる!」

3 メデイアは俺のかみさんだ……………済まん

「気を付け！ 伊丹二尉に敬礼！」

桑原曹長の声が響き整列した隊員達が伊丹に向け敬礼をし、伊丹も皆に答礼をする。

伊丹は集められた第三偵察隊^{三偵}の面々の前で自己紹介を始める。
そこには知った顔も数名いた。

「あゝ、第三偵察隊の指揮を任せられた伊丹耀司です。えゝ……………」
何を話して良いか解らず尻切れ蜻蛉の様な自己紹介に彼の優柔不断そうな態度も相まって、隊員の中には彼に命を託して大丈夫なのだろうかと思う者まで居る。

更に伊丹は話を繋ぐ。

「えゝ皆に紹介したい人が居る。この二人は自衛官ではなく防衛大臣からの特務で特別許可を得て我々と行動を共にする。ほんじゃ、メデイアから」

伊丹の三步後ろから前に出て来たローブを羽織るメデイア。隊員の皆がその美しさに目を剥く。

「メデイアと申します。生まれはコルキス、今のジョージア（グルジア）西部ですわ。皆様、宜しくお願い致します」

倉田三曹が思わず呟く。
「エッ、エルフ耳!？」

一礼をして伊丹の後ろに下がるメデイア。それと入れ替わりにズンズンと前に出て来た迷彩服を着ているギルガメッシュ。

「皆の者、我はメソポタミアの王ギルガメッシュである。余の顔を見据えるとは不敬で有ろう、雑——」

ギルガメッシュを寸での処で後頭部を叩く伊丹。
「皆すまん、こいつの日本語たまに変なんだよ。許してやってくれ」

隊員達は員数外の怪しい二人の事を伊丹に聞き始める。

「二尉、戦闘に捲き込まれた時の彼等の保護はどうするんですか？」

「基本しなくて良いかな。彼等はこの誰よりも強いから」

「へっ!？」

伊丹はさも当たり前のように答えるが、隊員からすると日本人では無いか弱そうな女性と手ぶらの男性の二人を守らなくても良いとは如何な事なのかと思う。

「二人は自分の身を自分で守る術を持っているし俺の指示にも従ってくれる。なあギル?」

伊丹はギルガメツシユの目の前で手をグーパーグーパーと握ったり開いたりして見せる。それを見たギルガメツシユは過去のトラウマを思い出したかの様にみるみる青ざめ震えだし伊丹の言葉に頷く。

「はっ、はい! 伊丹さんのお言葉は絶対です!」

「まっ、皆。そう云う事だから宜しくしてね」

財テクが趣味の戸津大輔はギルガメツシユと云う名前を聞き心当たりのある人物を思い浮かべる。

「ギルガメツシユさん。もしかして会社経営とかなさってませんか?」

経済新聞や経済雑誌で今急上昇の企業として取り上げられたのを見た戸津大輔は恐る恐る聞き出す。

すると態度が急変するギルガメツシユ。

「貴様、我を知っておると言うか! 我はKing Of

Hero 商事を片手間で経営しておる。ふむ、気に入った。貴様、名を何と云う。我に名乗る栄誉を与えろ」

「自分は戸津大輔陸士長であります!」

「貴様には特にこれを遣わそう」

ギルガメツシユはポケットから五本の木の棒を出し戸津大輔に渡す。

「原初の理を知るガリガリくんの当たり棒だ。しかも五本!」

「きつ、貴重品だ……………」

第三偵察隊には七三式トラック、高機動車、軽装甲機動車が割り当てられ、三偵の面々は各自割り当てられた車両へ乗り込む。そんな中メディアは一人残り皆を見送る。

「あれっ、隊長。メデイアさんは一緒じゃないんですか？」

伊丹の乗る高機動車の運転をする倉田三曹の質問に伊丹が答える。

「彼女には彼女にしか出来ない仕事をして貰うんだ。だから暫くは同行しないよ」

「えー、残念………あんな美人さんと仕事出来ないなんて——」

「おい倉田！　　下らない事言つて無いで出発するぞ！」

車両三台の出発をブンブンと手を振り見送ったメデイア。

「さて、この丘の調査を致しますか」

狭間陸将はメデイアの事を嘉納太郎防衛大臣から聞かされており、彼女は狭間陸将からの依頼を受け強固な防塞を造る為に、撃ち落とされた翼竜の死骸が未だ横たわるアルヌスの丘の麓までを護衛なしで歩き回り、霊脈の流れや集まりを調べ上げ呪文を施す。

メデイアは門を中心としたアルヌスの丘に防御に優れた六芒星型の防塞を造る様に防塞の設計段階からのアドバイザーとなったのである。

ヘルメットを被り図面を広げるメデイアのアドバイスの下、連合緒王国軍を敗走させてからの三週間は施設科が昼夜を問わず物理的、魔導的にも優れた門を中心とした鉄筋コンクリート製の防塞を突貫工事で造り出した。

帝国皇帝モルトは内務相マルクス伯爵から連合緒王国軍の詳しい被害状況の報告を受ける。

「陛下、連合緒王国軍の人員の損害は戦死者凡そ六万、負傷者や脱走兵を含めますと十万を越えます」

「ふむ、まあ予定通りだな。帝国の兵力が減った今、いつ牙を剥くとも解らぬ連合緒王国軍の兵も減らせてしまえば此方も安泰」

圧倒的武力を以て近隣国に侵攻し併合、若しくは帝国に有利な不平等な条約を押し付けて来たが為、帝国の存在を為らしめる兵力の大きな損失はいつ反旗を翻す国が現れないとも限らない。

そして皇帝はアルヌスの丘から帝国に繋がる街道沿いの村を焼き

払い、井戸には毒を流し込むよう焦土作戦をマルクス伯に指示を出す。

「これで暫くはアルヌスに屯する敵を足止めをしておけるだろう」

そんな皇帝とマルクス伯のやり取りを遮るかの様な凜とした声が響く。

「陛下！」

その声の主は赤髪の皇女ピニャである。

「陛下は我が国の危機的状況を如何お考えか！」

齒に衣着せぬ鋭い口調にマルクス伯は圧倒されてしまう。

「マルクス伯！」

聖なるアルヌスの丘には未だ賊徒どもがいる。先の連合緒王国軍の件も陛下に報せたのか!？」

額にうすら汗をかきピニャ皇女の鋭い問いに答えるマルクス伯。

「確かに連合緒王国軍に損害は出ましたがアルヌスの丘に賊徒どもを釘付けにしております。」

「結局は奪われたままだ！」

物は言い様だな、佞臣め」

ピニャ皇女の話は帝国の兵力の回復にまで及び、些か辟易としたモルト皇帝はピニャ皇女に話す。

「帝国は丘に屯する敵をよく知らぬ。そなたの騎士団が兵隊ごっこで無ければ見て来てくれはせぬか」

実戦経験が無いとは云えピニャは自らが指揮をする騎士団を兵隊ごっこと言われ齒噛みする。

「承知致しました、陛下」

今日もいつもの様に第三偵察隊は特地内の情報の収集にの為に近隣の村々に赴く。

防塞の基礎建築が終わりメディアも第三偵察隊と行動を共にする様になった。

先頭を走る七三式トラックには仁科一曹、富田二曹、古田陸士長が乗り、伊丹の乗る高機動車には運転手が倉田三曹、助手席に伊丹、後部席には桑原曹長、黒川二曹、栗林二曹、メディア、ギルガメツシュ

が乗り込んでいる。

最後尾の軽装甲機動車には勝本三曹曹、笹川陸士長、戸津陸士長、東陸士長が乗り込んでいる。

特地の青空の下、近隣の村を訪れるが出会うのは普通の人達ばかり。伊丹と同じ様な趣味を持つ倉田は異世界の住人達に些かガツカリし、ファンタジーに出て来る様な姿をした住人を期待していたと伊丹に話す。

「ファンタジーな娘は居ないんっすかねえ」

「ファンタジー娘？」

伊丹は倉田の好きなファンタジー娘を想像する。

「隊長はそんなの期待しないんですか？」

「そうだなあ、期待しなくも無いが俺はなあエルフ耳が——」

伊丹と倉田は同じ様な趣味を持つ者同士話が合う。

思わずメデイアが口を挟む。

「宜しかったですわね耀司様。耀司様の趣味に応えられる方が居らして」

「そうなんすつか、隊長はエルフ耳が……………あつ!？」

倉田はメデイアの一言で彼女の容姿を思い出す。

「どうした倉田——」

「もしかしてメデイアさんって……………」

いつも然り気無く伊丹の傍に居るメデイアを思い出す倉田は話を繋ぐ。

「もしかして隊長とご関係があるんですか？」

「……………」

「……………」

勿論メデイアから答える訳にも行かず、伊丹共々黙り込んでしまふ。

流星に伊丹が重い口を開いた。

「メデイアは俺のかみさんだ……………済まん」

「……………」

暫くの沈黙の後、高機動車内に隊員達の驚きの声が響く。

「ええーっ！っ！」

この余りにも響いた叫びにも似た声が前後の車両にも伝わり、無線を通して富田からの声が入る。

『隊長！　　どうかされましたか!』

「いや、何でもない。後で話すから……………」

いつもの様にコダ村に着き住民交流や近隣の情報を得るが、今日は脚を伸ばし更に奥地に進む予定である。

コダ村を出た第三偵察隊は得た情報と地図を突き合わせ次の目的地であるエルフの村へと前進する。

日も傾き桑原曹長の意見具申で野営をすることに決め森の手前で野営地を探す。

そんな最中、翌朝に伊丹達が目指す森の奥に煙が上がっているのを見付け桑原が双眼鏡を覗き込む。

その視界には炎を吐く大型のドラゴンが空を舞っている。

「一本首のキングドラゴンですか？」

伊丹は桑原から渡された双眼鏡を覗き込み指示された方を見る。

「おやっさん古いな。あれはエンシヤントドラゴンって云うの」
齢五十の桑原曹長には知らない言葉ではあるが伊丹共々只ならぬ事態で有る事を想像にする。

「野営は中止だ、中止！　　あれが居なくなるまで森に隠れるぞ！」

伊丹の指示の下、車両を森に乗り入れ隠し遠くから煙の上がるドラゴンが居る場所を双眼鏡で眺める。

「しかし何にも無い所を襲うかねえ？　　栗林ちゃん、一緒に見に行かない？」

伊丹の誘いを冷たくあしらう栗林二曹。

「あれの習性に……関心があるのでしたら隊長お一人でどうぞ」
そこにギルガメッシュが口を挟んで来る。

「なんなら我と一緒に行きま——」

ギルガメッシュの頭にメデイアの鉄拳が全力で振り下ろされる。その音は普通の拳からは決して出ない様な、宛ら大型ダンプがコンクリートの塊にぶつかった様な大きな音を出す。

その音に隊員達は一斉にメデイアに振り返る。

「ギル！ 貴方、もう一度指の骨を折られたい様ね」

青ざめるギルガメッシュとメデイアの不穏当な発言に彼女とギルガメッシュの間に何が有ったのか恐ろしい想像しか出来ない隊員達。

メデイアは伊丹にも注意を促す。

「耀司様。あの巨大な龍の強さも生態も解りませぬ故、危険な真似はお止め下さい」

「もう少し近くで見た方が良いか——」

「お止め下さい」

「はい……………」

エルフの住まうコアンの森を巨大な炎龍が襲う。

森の住人であるエルフ達は逃げ惑うが炎龍が吐く炎に焼かれ喰われていく。ある者は矢を放つが固い鱗には歯が立たない。そして焼かれ喰われていく。

炎龍の出現に寝ている娘を起こした父は避難をする様に彼女に諭すが、炎龍相手では逃げる場所が無いと弓を手にする娘。

部屋を飛び出した彼女が見た光景は集落が焼かれ幼馴染みが喰い千切られる物である。その光景に戦慄を覚え身体が硬直し迫る炎龍から逃げる事も出来ないで居る。

そんな娘の危機を見た父は炎龍の左目に目に矢を当て気を逸らす。

恐怖に固まる娘を父は満面の笑顔を以て井戸に放り投げ娘の無事を祈る。

そんな父の背後に炎龍の大きな顔が迫っている。彼女にはその後の出来事を知る由も無い。ただひたすら井戸の底で立ち尽くすだけである。

ドラゴンも飛び去り上空の監視を厳にしながら煙の上がついてた所に向け車両を進める第三偵察隊。

目的の場所に近付くにつれ焦げ臭さが車内にも漂う。

存在した筈の集落の入り口で降車し隊員を散開させ焼け落ちた集落の被害状況を確認する。

辺りは消し炭になった家屋の跡らしき柱とそこに住んで居たであろう住人達。半長靴の厚みがある靴底を伝って地面の温かさを感じる。

被害状況を伊丹に報告しに隊員達が集まり、およそ三十軒の家屋の跡が確認され死亡者は推定百人とみられた。

伊丹は集落の中心に有る井戸の縁に腰を掛け、水を汲むために紐が付いている汲み桶を井戸に投げ入れる。

すると乾いた音が井戸の底から響き伊丹を含めた隊員達が中を覗くと一人の間らしき者が倒れているのを見付ける。

唯一の生存者の可能性が有るため伊丹は井戸の底に降り一人の少女を救い上げる。

全身は水に浸かっていた所為か体温が低くはあるものの呼吸はしている。

伊丹と倉田は彼女の耳に視線を注ぐ。

「倉田はエルフ耳萌えか？」

「いえっ！　自分はケモノ娘の猫耳です！　やっぱりケ

モノっ娘が居るんでしょうね。期待しちゃいますよ！」

そんなやり取りをしている男性隊員を栗林二曹が一喝して追い払う。

「ごらっ！　見せもんじゃないんだから！　これだから男って！」

栗林二曹と黒川二曹の二人の女性隊員とメデアは救助したエルフの娘にポンチョを被せ高機動車へと運び濡れた衣服を脱がせブラケットを巻く。

伊丹は調査日報に書き記す。

「ドラゴンは人を襲うっつと」

伊丹の傍に来て敬礼をする黒川二曹は、救助したエルフの少女の処遇について話し出す。

伊丹は当然の事として保護する旨を黒川二曹に話す。

「だってほらっ、俺って人道的じゃん」

そんな伊丹に黒川二曹は冷たく伊丹の趣味を交えた答えをする。

「隊長は特異な趣味をお持ちですから、エルフ耳に惹かれたのかと思いました」

「なっ、なんと！」

炎龍が現れただど!？」

第三偵察隊はアルヌスの丘の駐屯地に戻りがてらコダ村に寄り、伊丹が村長に炎を吐く巨大な龍を見た事をイラストを交えながら片言の特地語で知らせる。それを知った村長はみるみる青ざめ村中に炎龍出現を報せ村民はパニック状態となり、村を捨てての避難となる。「人やエルフの味を覚えた炎龍は再び辺りを襲い出す。儂らはもうここには住んでは居られん」

伊丹は唯一の生存者であるエルフの娘を保護した事を告げ、コダ村の村長に引き渡そうとしたが、人とエルフとは生活習慣も違いエルフの生息も解らない事から拒否をされてしまい、結局は伊丹達の保護下に置かれた。

こうしてコダ村の住人達の村を捨てての逃避行が始まった。

4 二尉！ 隊列後方に炎龍です！

炎龍出現の報せを聞いたコダ村の住人達は各々が荷馬車に財道具を積み始める。中には家財を積み過ぎて車軸が折れてしまう馬車もある。そんな馬車が村の道を塞ぎ村人達の避難を遅らす。

コダ村に住む魔導師カトーとその弟子である少女、

レイレイ・ラ・レレーナは荷馬車に大量の書物や魔導に関わる道具を積み込む。しかし過積載により馬車はピクリとも動かない。

仕方無くレイレイは馬車に浮遊の魔法を懸けて僅かに浮かせ動き出す。しかし村の道は車軸が折れた馬車が塞ぎ渋滞を起こしていた。

そんな渋滞の中を斑服を着た異国の言葉を話す者が何やら指示を出しているのが目に留まったレイレイ。中には女性と思われる斑服を着た者も居る事に気が付く。

「お師匠、ちよつと見て来る」

レイレイは渋滞の先頭の状況を確めるべく馬車を降り荷馬車が列なる先頭へ向かう。

そこには脚が折れ暴れる馬と横倒しとなり道を塞ぎ荷が散乱した馬車がある。

馬車から投げ出された親子は道端で倒れ込んでいるが、既に伊丹達が怪我人の状態を確認しメディアがひっそりと治癒の魔法を懸け回復させている。

倒れて意識の無い少女にメディアが治癒の魔法を懸けているとレイレイが傍に寄って来る。レイレイはメディアが魔法を行使しているのが判り、メディアもレイレイから魔力を感じた。

「もしかして貴女は魔術師なのから」

「私はレイレイ。魔導師カトーに師事する賢者」

「あらっ！ これは失礼したわ。可愛い賢者さん」

怪我の治癒をしていると突然馬が立ち暴れだす。身の危険を察したレイレイだが逃げ場が無かった。

それを見たギルガメッシュは暴れ馬に飛び乗り首をへし折り馬をどこか遠くに放り投げレイレイは命の危機を救われた。

(この人達は私を助けた……………?)

この状況を目の当たりにした伊丹以外の三偵の皆は口をアングリと開けギルガメツシュの持つ力を思い知った。

「伊丹さん、勝手に行動して済みません」

頭を下げるギルガメツシュに伊丹は握り拳に親指を立てる。

「ギル！ グツジョブ！」

そんなギルガメツシュの人為らざる怪力振りを見せ付けられた隊員達は伊丹に詰め寄り詰問する。

「たあくいちよく、あのギルガメツシュって人、何者〜?」

「ああ、ギルの事ね。後で話すから」

伊丹は適当に誤魔化しつつ今は目の前で起きている村人達の誘導を第一に行う様指示を下す。

隊員達は伊丹の指示通りに動いているがメデイアとギルガメツシュが第三偵察隊と行動を共にしている事をいぶかしがる。

(メデイアさんは二尉の奥さんとか言うしギルガメツシュさんは暈されるしどんな人達だろう……………)

どうにか村の道は通れる様になり村人達の荷馬車が村を抜けて主要街道に進み出す。

照り付ける太陽の下、街道をノロノロと進む荷馬車や人の列は先頭に居る伊丹達からもその最後部が見えない。

前日の雨で道が泥濘ぬかるみ、車輪が泥濘に嵌まれば三偵の隊員達やギルガメツシュが桑原曹長の掛け声の下、一斉に荷馬車を押し出したりもしている。

中には道脇に横転したり車軸が折れた荷馬車もある。全ての者が公平には生を与えられている訳では無い。列から落伍する者、せめて子供だけとは他人に託す家族。皆が自分達だけで精一杯なのである。

伊丹の乗る高機動車にも妊婦と怪我人、それと身寄りを無くした子供達が乗っていた。七三式トラックにも定員オーバーの子供や老人を乗せている。

避難民達と歩みを共にしているメデイアが伊丹に念話で話し掛ける。

（ 耀司様、私の魔術でこの状況を—— ）

（ メディア駄目だ。冷たい様だけど俺達は彼等の生活や習慣に介入してはいけないんだ。俺達に出来る事はほんの少し手を貸すこと位なんだよ ）

（ でしたら私の竜牙兵を泥濘に嵌まった荷車の引き上げ等の使役に使わせて下さい ）

（ 竜牙兵に肉体労働か………良い提案だね、有り難うメディア。避難民の隊列の最後尾に竜牙兵を派遣してくれ。流石にうちらもそこまで目が届かないから ）

メディアは隊列の最後尾に竜牙兵を地中から沸き上がらせ脱落しそうな避難民の手助けを任せる。最初こそは怖がっていた避難民も手助けをし出す骸骨に慣れ出し、泥濘に嵌まった荷馬車が出ると骸骨が無言で荷車を押し出すと云った奇妙な光景があちこちで見られる様になる。

竜牙兵の行動が徐々に隊列の前方に噂として流れてくる。それを耳にした栗林二曹。

「二尉、骸骨の集団が避難民を助けているとの噂が流れていますので、確認してきます」

「いや、その必要はないよ。彼等は無害だから安心していいからさ」

「えっ？ 二尉はご存知でしたの？」

「ん？ メディアが絡んでいるから気にしないで」

隊の士気の事もあり伊丹はメディアを奥さんだのかみさんだのと言う事を避ける。

「二尉の奥様は何をなさつ——」

「帰ったら話すよ………それとメディアの事を奥様とか呼ぶのは止めてくれ。一応ここだけの話なんだから他の隊の隊員達に知れたら大変じゃない？」

黙々と歩き続ける事に飽きたメディアは村で見掛けたレイの乗る僅かに浮遊している荷馬車を探し出し彼女に近付き声を掛ける。

「あらっ、村で会った可愛い賢者さん」

「あつ、貴女は——」

レレイが返答しようとした途端、同乗している魔導師カトーが口を挟む。

「これはお美しい方じゃな。この荷馬車は狭い故、儂の膝の上で宜しければお座りなさい。さあ——」

そんな師匠の恥ずかしい言動にレレイは風の魔法を以て彼の顔面に圧縮した空気をぶつける。

「これ、止めんかレレイ。魔法をその様な事で軽々しく使つて為らん」二人のやり取りを見てクスリ笑い出すメデア。

「貴方がそちらの可愛い魔法使いさんの師匠さんつて事なのね。貴方の膝の上に座らせて頂くのは遠慮しとくわ」

メデアのローブ姿に同業者の匂いを感じたカトー。

「あんたも魔法使いか？」

魔導師カトーの言葉を横に振り訂正するメデア。

「私は魔法使いではなく魔術師よ」

レレイは村で見た事を師匠のカトーに話す。

「お師匠、この人は村で怪我をした人に斑服の人達と治癒の魔法を懸けていた」

メデアは日本と特地の文明の進化レベルの違いを思う。

（ 耀司様の世界では魔術の区分に入る物でも、此方の世界では魔法になってしまいますわね。しかしこの世界の魔法とはどのような物なのか情報を集めないといけませんわね ）

メデアは暇潰しに荷馬車に乗っているレレイやカトーらと話ながら歩き出す。

伊丹に隊員から直ぐ傍で荷馬車の車軸が折れたと報告が入る。

伊丹は村長を連れ壊れた荷馬車の持ち主に会い村長説得の下、必要最低限の物を持たせ壊れた荷馬車に火を着ける。

高機動車に戻った伊丹は黒川二曹に疑問を呈される。

「二尉、何も火をかけなくても良いのでは……………」

「ああでもしないとずっと彼処に立って動こうとしないからさあ……………」

「なら本部に車両増援は要請出来ないんですか!？」

「此処は敵地だよ。増援頼んで敵さん刺激して戦闘始まって挙げ句戦力を逐次投入なんて泥沼には入れない、ってさ」

伊丹の答えに黒川は伊丹も同じ事を考え本部に伺っていたのだと判る。

「それにそうだったら避難民を巻き込む事にもなるし……………」

第三偵察隊の車両は荷馬車の列の速度に合わせての運転である。ローのままのリープでの亀の様な走行。運転をしている倉田は教習所以来だとボヤク。

高機動車の助手席に居る伊丹の視界に常にチラチラと入るギルガメッシュ。これも高機動車に伴って歩いている彼なりの伊丹に自分の所在を把握させる手段である。

「伊丹さん、こんな村の連中放って置いてさっさと帰りましょうよ。生き残る者は死の淵にあっても生き残りますし、死ぬ者は何もせず己の不幸のみを嘆き死んでいきます」

この様な逃避行に手を貸す意味が解らないギルガメッシュに伊丹が眉間に皺を寄せ、ため息を吐き答える。

「ギルウ、物騒な事を言うなよ。第一、人道的では無いでしょ! そんな事をしないのが自衛隊な訳よ。それに万が一、放置をしたとか嫌疑が懸かっただけで政府が野党から吊し上げ喰らうしさ」

「現代日本は温い、温すぎる! 恐らくこの地でもそうだと思いますが、私が治めていた時代は強者が、そして生きる術を持った者が生き残ってこそその世界でしたか!」

伊丹の横で運転をしている倉田には丸聞こえである。

（隊長の知り合いって何者? たしかポタポタ王とか言っていたっけ……………」

「ギルの頃とは時代が違うんだよ。早く現代世界に馴染めよ」

「それはそうですが……………」

車外のギルガメッシュと話をしていると前方に不自然なまでのカラスの群を目にした伊丹は双眼鏡を覗き、ハルバートを携え座り込んで居る黒服のゴスロリ少女を確認し部下二人と万が一に備えてギルガメッシュを遣わす。

ハルバートを持つ少女に警戒感を露にしたギルガメッシュが言い放つ。

「其処に居ては通れぬであろう。とくと失せよ、雑種」

いきなりの高圧的な態度に同行した隊員達も冷や汗をかきながら件の少女に話し掛けるが話が通じない。

「私の言葉が解せんのか雑種？ ならば直接身体に——」

『ギル、その先を言ったらアウトだからな』

無線から伊丹の声が入る。

「はいっ！」と直立不動になるギルガメッシュを脇に見ながら伊丹達の乗る高機動車に歩み寄る黒ゴス少女。

「貴方達は何処からいらしてえ、どちらへ向かうのかしらあ？」

特地語が解らず慌てる伊丹を余所に同乗している子供が答える。

「ゴダ村からだよ、お姉ちゃん」

「嫌々連れて行かれていますとかじゃ無いのお？」

「違うよ、村の近くに炎龍が出たから避難しているんだよ」

黒ゴス少女は子供に『馬高が居機ない荷馬車車』の事を聴くが原理は解らないが乗り心地は良いと知り、横たわるエルフの少女の脇にハルバートを置き無理やり高機動車に乗り込もうとする。

レイヤカトーの話し込んでいたメデイアは列の先頭に人為らざる雰囲気を感じた。

「導師さんと賢者さん。ちよつとお暇を頂きますわね」

するとメデイアがローブを抜け蝶の様に舞い上がり伊丹の元へと飛び去ると、レイヤカトーはひたすらぼかんと口を開け空を眺めている。

「お師匠！ あれは凄すぎますー！」

「あのご婦人はどこで魔導を極めたんじや？ レレイよ、世の中は広い。我らの知らん魔法も未々有ると考えよ」

伊丹の乗る高機動車の真上に着いたメデイアはゆっくりと降りる。

「そのゴスロリさん。貴女は何をしようとしているのかしら？」

メデイアのその只ならぬ魔力を感じた黒ゴス少女は、驚きこそしたものの悪びれもせず高機動車の助手席に乗り込み伊丹の膝の上に座り出す。

「小娘がぁー……！ 耀司様の膝の上に座るなど——」

メデイア周辺の魔力が高まりだし周囲に円環を纏うが、それに気が付いたギルガメツシュが慌ててメデイアと高機動車の間に身体を割り入れる。

「キャスター！ 伊丹諸とも吹き飛ばすつもりか!？」

必死に止めるギルガメツシュに諭され魔力を収めるメデイアだが、伊丹の膝の上に座る小娘がどうにも気に入らない。

そんなメデイアの気持ちを感じた伊丹はゴスロリ少女にシートを半分譲る。

「はぁぁあ、シートに半ケツかぁ。尻が痛くなるし落ち着かないねえ」

「よ、耀司様……」

倉田は空を飛んで来たメデイアの事を隊員を代表して伊丹に訊き出す。

「隊長、メデイアさんってどんな方なんですか？ さつきも

空を飛んでいたし……」

「メデイアか？ ん………魔術師」

「ええ……っ！」

車中に居る倉田と黒川が驚きの声を上げ、それが外に居る隊員達にも聞こえる。

「隊長、ちよつと待って下さいよ！ メデイアさんとは日本で知り合ったんですね？ 特地の人じゃ無いんですね？」

「ああ、メデイアとは俺が文科省に出向していた先の冬木市で知り

合った。彼女は日本国籍もあるぞ」

「魔術師なんて日本に居たのかよ……………」

呟く倉田に、政府も情報を隠す聖杯戦争を大衆に公言出来ない伊丹。

「この事は極秘事項でもあるから他には話すなよ」

後部に居る黒川が話に入ってくる。

「二尉、メデイアさんってもしかしてギリシャ神話に出て来るあのメーディアですか？」

「おつ、クロちゃん知ってるね。お父さんが海自なだけの事はあるね」

「船乗りには星の位置情報は基本らしいですから自ずとギリシャ神話の話が聞かされました。まさかギルガメツシユさんはあの叙事詩の方ですか？」

「鋭いね！ そう云う事。帰ったら皆に詳しく話すよ」

倉田や黒川のお陰(?)で隊員皆にメデイアとギルガメツシユの正体が人為らざるものを持っている者である事が知れ渡る。

昼過ぎになり太陽は午前中とは比べられ無い程高く昇り辺りはその熱射に晒される。

そんな高く昇った太陽を背に巨大な龍が避難民の列に襲い掛かる。ある者は上半身を喰い千切られ、またある者は踏み潰される。そして口から吐かれた炎により辺り一面が焼け、避難民も焼かれていく。

「二尉！ 隊列後方に炎龍です!!」

軽装甲機動車の銃座に居る笹川陸士長が伊丹に報せる。

伊丹は隊員達に戦闘準備をさせ避難民から炎龍を引き離す為、炎龍に向けて各車荒れ地を走り出す。

一方伊丹から炎龍を避難民から引き離す様に念話で指示されたメデイアとギルガメツシユ。

メデイアは空高く舞い上がり、炎龍の気を引く様に自身の周囲に纏った円環からビームを放つ。

「貴方の相手はこの私ですわ！」

レイは空を浮遊するメデアを見付け空を指差し師匠のカトー導師に言う。

「師匠、あそこにさっきの魔術師の人が！」

カトーがレイが指差す方に目をやるとメデアがヒラヒラと空を舞い、炎龍に魔術攻撃を展開している。

「おおっ！ これは凄いぞレイよ！ よく見ておきなさい」

ギルガメツシユも炎龍の背後に回り込み何も無い空間から数多の槍剣を出し射出する。

「ふっ、トカゲ擬きが。まさに雑種か」

メデアのビームは炎龍の厚い鱗に弾かれ、ギルガメツシユの槍剣も突き刺さりはするが炎龍には蚊に刺された程度感覚でしかない。

「よく踊るではないか、雑種」

（本気では無いとは云え、私の剣の投射では手傷を負わせられぬとは！ あの様な雑種にはこの王の剣を使いたくはないのだが、ここは乗離剣エアでも——）

ギルガメツシユ乗離剣エアの使用を考えた途端、伊丹からギルガメツシユに念話が届く。

（駄目だギル！ エアは使わない！ この世界へ及ぼす影響が解らない！）

メデアとギルガメツシユが気を引いている間に伊丹達が到着し各車が避難民から炎龍を引き離す様に荒れ地を全速で走りながら一斉に銃の引き金を引く。

伊丹は軽装甲機動車からは五十口径重機関銃キャリバーを撃ち込む様に笹川陸士長指示を出す、固い鱗に阻まれ貫通しない。

「駄目です！ 弾かれます！」

叫ぶ笹川に伊丹は言い返す。

「兎に角当て続ける！ 撃て！ 撃て！」

弾かれる事が解りつつも各自が小銃を撃ち続けていると炎龍の口

元が赤く光り出す。

「ブレス来るぞ！」

全車の回避行動と炎龍が考える以上の機動力で火炎の直撃は免れる。

伊丹達が炎龍のブレス攻撃に晒されるのを見たキャスターは肝を冷やすが、無事に回避したのを見届け胸を撫で下ろす。

「よくもよくも私の耀司様を……っ！」

メディアは怒りに震え、効果の無いビーム攻撃を止め、直径数メートルはあるであろう巨大な光線、ヘカティック・グライアーを放つが炎龍が姿勢を変えた為、狙いが逸れ尾の先端を焼くに留まる。宝具級とは云えヘカティック・グライアーでは炎龍と相性が悪い様である。

荒れ地を全速で走る為、高機動車の中に居る避難民の子供や怪我人も車内にしがみついて居るが右や左に身体を振り回されている。そんな中に意識を取り戻したエルフの娘が現状を把握し伊丹な炎龍の目を狙う様に自分の目を指を差しながら何度も「ono! ono!」と言う。

彼女の意図する事が解った伊丹は全車に炎龍の目に射撃を集中させるよう指示を出す。この目を狙った攻撃に炎龍は顔を底い動きが止まる。

伊丹は軽装甲機動車の勝元に個人携行の対戦車弾を使うように叫ぶ。

「勝本！ パンツァーファウストだ！」

笹川と入れ替わる様に車上に出てきた勝本は110mm個人携帯対戦車弾パンツァーファウストを構えるところの状況で後方の確認を出す。

「よつと、後方の安全確認」

皆が早く撃つてくれと願う中、荒れ地での行進間射撃となり走行の揺れでスコープにターゲットを捉えられずタイミングが合わない。

照準内に炎龍を捉えた勝本は引き金に指を掛けるが、悪路の凹凸で軽装甲機動が揺さぶられ必要以上の力で引き金を握り締めた為、弾頭の軌道が炎龍から逸れだす。

「あいつガク引きしやがった！　ありや当たたらねえなあ」

翼を広げ飛来する弾頭を避けようとする炎龍に、高機動車の幌を破り、上体を出した黒ゴス少女が投げたハルバートが当り脚をもつれさせ倒れ込む。しかし伊丹の予想した様に弾頭は外れるが、黄金の鎧を纏ったギルカメツシユが炎龍の背後から跳躍し斬りかかる。

「雑種が我に余計な力を使わせるとはな」

一振りで炎龍の左肩から先を切り落とすギルカメツシユ。

恐らくは食物連鎖の絶対的な頂点に位置する炎龍自身ですら信じられない事が起きたのであろう。自分自身の身体の一部をもぎ取る存在。そして初めての痛み。

片腕を無くした炎龍は、大地を揺るがすかの様な咆哮を上げると翼を拡げ羽ばたき、最後の一撃とばかりに浮遊するメディアを叩き落とし空へと飛び去って行く。

「ぎやあー！」

盛大に地面に叩き付けられたメディアは飛び去る炎龍に悪態を着く。

「痛たたたっ！　何なのよ、あの大トカゲ野郎は！」

伊丹は奮戦した後に墜落したメディアの元に駆け寄る。

「メディア！　大丈夫か!?!」

「ええ、大丈夫ですわ。隊員の方々は皆さん無事ですよ？」

「ああ、君やギルの活躍のおかげで助かったよ。それにしても流石だったな、ギル」

「まあ、あんな雑種ゴどきにこの我に手を下させるとは、伊丹の慢心も大概にいたせよ」

素に戻っているギルカメツシユに嬉しさと頼もしさを感じ伊丹は礼を述べる。

「ああ、有り難う。ウルクの王よ」

「くっ、何を今更……伊丹さん」

伊丹は隊員達やメディア、そしてギルガメツシユが無事であった事にほっと胸を撫で下ろすが、村人の損害が著しいものである事に胸を痛める。

何やらどこかの宗派の神官なのだという黒ゴス少女。隊員達は村人と共に犠牲となった人達を埋葬し黒ゴス少女が神に祈りを捧げる。

三日三晩の逃避行の後、避難民がそれぞれの新天地に向かうに当り伊丹は身寄りの無い子供や怪我人についての処遇を村長に話す。が神の思し召すままだとの答え。

「薄情に聞こえるかも知れんが、避難民皆が自分の事で手一杯で誰も引き取れないんじや」

余りの薄情さに驚くが、それでも避難民がそれぞれの地へと別れ去って行く姿をいつまでも手を振り見送る第三偵察隊の隊員達。

こうして散り散りになった避難民達が何の見返りを求めない炎龍を撃退した緑の人の伝説を拓めるのである。

残された怪我をした大人や身寄りの無い子供達合わせて二十三名は村長から見捨てられたと理解をし、伊丹の判断に身を委ねるしか道がなかった。

皆の視線が伊丹に集まる。そんな幾つかの視線と目を合わせてしまった伊丹。

「まっ、いいか………大丈夫！ まかしておきな」

見捨てられた村人と隊員達はほっと安堵し微笑みを浮かべ基地へと帰投するのである。

5 鉄の逸物さ！

炎龍を撃退した第三偵察隊により救われた元ゴダ村の住人達は、落ち着いた先の町や村でこの事を話し広める。

とある町の飲み屋で女給の仕事を得たゴダ村避難民だったメリザもそんな一人である。

メリザは酒場の客達に村からの逃避行の悲惨さを話し、そこに彼等が云う何処の軍隊かも解らない『緑の人』の活躍が差し込まれる。

「あたしや神に祈ったさ。せめて子供だけでもつてね。でも神なんか居やしない事が解ったよ」

酒場の客達はメリザの話を水を打ったような静けさで聞いている。

「そんな時だよ！ 照り付ける太陽が有るのに大きな影が空から地面を写し出したのは！ 何かと思つて顔を上げ空を見るとあいつが虎視眈々と狙つていやがったんだ！」

客達もメリザの話に生唾を飲み込み続きを静かに聞いている。

「ああ、そうさ、炎龍だよ！」

酒場の聴衆達は『おおーっ！』と声を上げざわざわし出す。

たまたまこの酒場にお忍びで来ているピニヤ・コ・ラーダのお供の一人である騎士ノーマはメリザの話に茶々を入れ出す。

「大体炎龍がそんなに簡単に撃退されるか？ どうせ翼竜か新生龍の間違いだろ!？」

否定的なノーマの物言いにメリザはムツとしたがハミルトンのチップを弾む機転により再びメリザは話し出す。

「あんたらがあれをどう考えようが構わないさ。しかしあれはどう見ても炎龍さ！ 吐き出された炎で大勢が焼かれ喰われたんだ！」

話は炎龍に気が付いた緑の人の戦い振りへと話が続く。

「彼等の荷車は馬で引いてはいないが頗る速い！ 炎龍を村人から注意を逸らすように荒れ地へ走りだし魔法の杖で攻撃をするも炎龍相手では力及ばず。するとその隊長が仲間に『あれ』を出させたんだ」

ハミルトンを始めとした客は『あれ』に集中しだす。

「鉄の逸物さ！ 形はまさにそのままだよ。それを『コハウノアゼン

カクニ』って呪文を言い終わると轟音と共に炎龍の左腕が肩から吹き飛ばされたって訳だよ！」

このメリザの話に酒場は大いに盛り上がるが、そんな話を盛り上げる彼女にピニヤが問い掛ける。

「その緑の人とやらが使っていた魔杖も鉄の逸物の様な形をしていたのか？」

ピニヤからの問い掛けに「ふんっ！」と鼻を鳴らし答えるメリザ。

「あんたみたいのをかまどとつて言うんだよ！ 逸物は逸物さ！」

ピニヤは緑の人、彼等の持つ魔杖、そして逸物の意味が今一解らないが鉄の逸物について考え込む。

(これは調べてみる必要が有りそうだな……………)

駐屯地にコダ村の避難民二十名以上を連れ帰った伊丹を待っていたのは檜垣三佐からの叱責である。

「きつ、きつ、君は何て事をしてくれたんだっ!!」

「は、はあ〜」

伊丹の気の抜けた返事に頭を抱えてしまう檜垣三佐。

檜垣は自分の職務権限では解決できない問題の為、狭間陸将の元へ伊丹を連れて行く。

その頃狭間陸将は幕僚でもある柳田二尉から各深部偵察隊の持ち帰った情報を聴いている。

柳田二尉は各偵察隊の現地民との一次接触は良好であり更なる情報収集の手段として、第三偵察隊が警護している避難民を利用する旨を進言する。

そんなやり取りをしている部屋に檜垣三佐が伊丹を連れ訪れる。

「狭間陸将、実は困った事態になりました……………」

檜垣は伊丹が身寄りの無いコダ村の避難民を連れ帰った事を報告する。

この伊丹の行動に狭間も柳田も啞然とする。

狭間陸将は連れてきた身寄りの無い人間を今更基地外に放り出す

訳にも行かず、人道的措置として保護する事にした。

しかし伊丹は保護した避難民の食と住の面倒を看るための段取り全てが任され、関係各所に提出する苦手な書類作製を考え悩む伊丹を柳田二尉が誘い、物干場で煙草をふかすと話し出す。

「よう伊丹。お前さん態とだろ」

柳田二尉は伊丹の二尉昇進よりも先に二尉に昇進している為、先任将校として伊丹より一段高い地位にいる。

柳田は定時連絡を欠かす事をしなかった伊丹が炎龍撃退後から連絡をしてこなかった事を問い詰める。

「連絡でもしたら避難民を放り出せとか言われかねないとも思ったのか?」

「それはたぶん磁気嵐や電磁層の影響かなあ〜って」

適当な言葉を並べ言い訳をする伊丹に柳田が話す。

「まあいいや、遅かれ早かれ現地民とは交流を持たなきゃ為らなかつたんだが、こつちにも段取りや手順でもんが有るんだよ!」

柳田は深く煙草を吸い紫煙を吐く。

「なあ伊丹。お前さんはこの世界をどう見るよ。豊富な地下資源があるんだぜ。日本が世界の半分を敵に回してまでも果たしてこの地を押しやる必要があるのか!？」

それほどの地なんだよ、この世界は! お前さんが連れて来た避難民から現地の資源状況とかも知りたいんだ」

「なあ柳田さん。俺は世界情勢には興味がない。俺は連れ帰った避難民の今日明日の住居や食糧にしか頭が回っていない。柳田さんがその避難民に聞き取り調査をすと言ったが、幼い子供達から金銀財宝がどこに有るのかを訊くってのか!？」

子供にまで聞き取り調査の対称にされては叶わないと伊丹が柳田に喰って掛かる。

「なあ伊丹、それだけの価値のある世界だと思っておけ。それとお前さんには近々行動の自由が大幅に認められる。まあすっかり結果出してこいや」

柳田は伊丹との話が終ると吸っていた煙草を捨て靴の裏で揉み消

し去っていく。

避難民の住居は、拠点内を帝国軍が攻めて来て戦闘になった時の危険を考え、丘の麓の戦闘には巻き込まれない様な土地に住まわせる事が決まる。

自衛隊の隊舎もまだまだプレハブで建設中の為、仮設の住宅が出来るまで一時的にテントを避難民の住居とし、食料も暫くは戦闘食で賄う。

日を追うごとに施設科の建設重機が回され始め、チェーンソーで森を開きシヨベルカーが土地を掘り返し均し生活基盤の建設が見え始める。

この自衛隊の重機の作業の効率の良さに関心を持ったレレイは毎日の様に現場に赴く。

（賢者としてこの様な事を見逃してはいけない。はやく彼等の事を知らなくては……………）

レレイは隊員達とのやり取りで、彼等の言葉、即ち日本語のマスターが一番であると結論付け、がむしゃらに日本語の習得にのめり込んで行くのである。

テント暮らしをしている彼等の護衛はメデイアの竜牙兵である。

「こんな事まで頼んじまって済まない、メデイア」

「そんな些末な事は気に為さらずとも良いのです。耀司様もこのキャンプ設営にはかなり骨を折られたと聞き及んでいますわ」

「そろそろ第三偵察隊の皆にメデイアとギルガメツシュの事を話すか……………」

伊丹は避難民のキャンプで動き回る隊員達を集めてメデイアとギルガメツシュの正体を明かす。

炎龍撃退時、その活躍を目にしていた隊員達は今更かよと思いつつも伊丹とその従者の話を聞く事となる。

メデイアは簡単な魔術を披露し、ギルガメツシュは空間から剣を取り出す。

「——と云う訳だ、皆。これからも頼むよ」

伊丹は隊員達に手を合わせペコりと頭を下げる。

すると隊員達は伊丹そっち除けで従者二人に集まり出す。

「ギルガメッシュさんの倉庫は猫型ロボットのポケットと同じなんですねー！」

「こら待てっ！ 我のは倉庫ではない！ 宝物庫だ！」

「原初に拘っているけど、要は型落ちな訳でしょ？」

「無礼者！ 断じて型落ち等ではないぞ!!」

「メデアさん、忘年会で本物の魔術ショーをやって下さい！ 人体切断とか!! なんなら二尉の首をギロチンで——」

「いえ、流石にそれは……………」

ギルガメッシュとメデアに集まり出し好き勝手を言い出す隊員達。

「みんなあく、二人を紹介したんだから仕事に戻ってくれるかなあ……………」

隊員達は渋々それぞれの仕事に戻って行く。

保護した避難民の生活もテントからプレハブの仮設住宅に変わり生活者の名簿を作る為、レイの通訳を交えての作業となる。

「さっさと並ばぬか！ きちんと申告せよ。雑種」

伊丹はギルガメッシュの言葉を聞き右手を握り締め上げる。その行動に青くなりブルブル震えるギルガメッシュを見た伊丹は徐に自身の左肩をトントンと叩き出す。

「肩が凝るなあ……………」

（ギル！ この人達を雑種呼ばわりするなよ！）

（ひいつ！ いっ、以後、気を付けます。伊丹さん）

ギルガメッシュに変わりメデアが特地語で避難民に声を掛けると皆が素直にその指示に従う。

（あらあら、まあまあ、人徳の差ですわね）

メデアは魔術繋がりでレイやカトー導師とかなり親しくなり、

その会話の中で単語や文体のパターンを見付け、日常会話位なら話せる様になつていた。

伊丹はそんなにメデイアを周囲の隊員達から解らない様に頭を撫でながら褒める。

「やるなあ〜メデイア。やはり稀代の魔術師だよな」

「嫌ですわ、耀司様。褒めて下さるならベッドの中で褒めて下さいまし」

伊丹の頬を意味ありげに撫でるキャスターに彼は慌てて跳び退き辺りを見回す。

「あわわわわっ！ 他の隊員が聞いていたらどうするんだ！ 俺ら夫婦は特別な計らいで一緒に居られるんだぞ。他の隊員の事も少しは考えてあげてくれると助かるな」

「畏まりました。他の隊員の事もお気遣いになられて耀司様はお優しいのですね」

「まあ、隊の責任者だから俺が率先して隊の風紀を乱すのは良くないだろ？」

名簿作りで判明したことは、人種ひとしゅは概ね見た目通りの年齢でレレイ・ラ・レレーナは15歳の少女ではあるが特とく地では成年である。

エルフの少女のテユカ・ルナ・マルソーは165歳。

黒ゴス神官少女のロウリイ・マーキュリーは暗黒の神・エムロイに仕える身であり、テユカよりもずっと年上で、通訳のレレイも細かい歳までは恐くて聞くことが出来ず現在年齢不詳である。

朝食以外の食事と仮設住宅を与えられたカトー導師以下のキャンプの住人達が、夜に集まりこれからの生活について話し合っている。「俺らは自衛隊の世話になりっぱなしじゃ。なんとか自活する術を見付け生活費位は自分達で何とかしたいが……………どうしたものか……………」

テユカや年頃の女性は自衛隊員に身売りする事すら考えている。

「翼竜の鱗は貴重品でもあるし、丘に骸を晒している翼竜の鱗の数枚でも自衛隊から分けて貰えると有り難いのじゃがのう……………」

翌朝、レレイとカトー導師はキャンプの住人代表として伊丹を通じて、野晒しにされている帝国、連合諸王国軍の翼竜の骸の鱗の収集の話を持ち出すと、自衛隊としては射撃訓練の的にしかしていないから幾らでも集めて良いとの回答を得る。

この回答に驚いたカトー導師以下のキャンプの住人達。

特地では竜の種類にこそ差が有りはするが、概ね高値で取引がされている。しかもそんなお宝が目の前に山のように有り取り放題ときた。

さっそく男児と怪我の治った男達が翼竜の骸から鱗や爪を集めだし、女兒や女達が集められた鱗や爪の洗浄と云う作業が始まった。

そんなキャンプの住人達の行動に些か興味を持ち出したギルガメッシュが暇潰しにキャンプに寄る。

「ほう、貴様らはこの鱗を以て商いをすると言うか。面白いぞ雑―否、下々の民よ。名付ける事を許すぞ！ このキャンプの協同生活の礎を！」

こうしてここにアルヌス協同生活組合が誕生した。

かなりの量の磨かれた鱗が集まりだし、今度はそれを換金する必要に迫られる。

質の良い鱗一枚でデナリ銀貨三十枚から最高七十枚の値が付く。そんな鱗が二百枚と爪三本がある。因みにデナリ銀貨一枚は、五日は食べていかれる位の額である。

レレイは現金決済をしてくれる大商人相手に販売したい事をカトー導師に相談すると、イタリカで商いをしている、カトー導師の古くからの知り合いのリユドーを紹介してもらいそこでの取引を考える。

アルヌス協同生活組合は自衛隊にイタリカまでの輸送を依頼すると、自衛隊としてはキャンプの住人達の自活問題が解決する他、イタリカの街の様子を探れる事からその輸送任務を伊丹の三偵に任せた。

隊舎に居る伊丹を喜ばせたのは、内地とインターネット通信が出来た事である。

「むふふふつ、やっと内地と繋がったか！ これでweb小説が読めるわけだな」

そんな伊丹の背後には栗林と黒川、そしてメディアが立ち、声を掛けている。

「二尉……………二尉?……………二尉!」

「おやおや！ 極右骸の話に評価で★0が付いてギツクリ腰だつて。腰は大事にしないと——」

インターネット回線が繋がり喜ぶ余り、伊丹の耳には部下二人の声が届かない。

そんな伊丹の脚を、半長靴の爪先で思いつき蹴りあげる栗林。

「二尉!!」

「うがつー!」

蹴られた脚を抱え踞る伊丹を上から見下ろす様に口を開くメディアと黒川。

「あらあら、まあまあ」

「二尉、聞いて下さい」

いつまでも踞る伊丹に、メディアは指先一つで彼の首をほぼ180度にゆっくりと捻り出す。

「耀司様、いい加減こちらに顔を向けて下さいまし」

「あぐぐぐ、か、勘弁して、メディア。首がああ」

改めてメディアの恐ろしさを知った栗林と黒川は、目の前のホラー映画のワンシーンの様な状況に半ば青ざめながら伊丹に話をし出す。

「二尉、保護をしたテユカ・ルナ・マルソーなんです……………」

「ん? 彼女がどうかしたの?」

黒川はテユカが支給の食事と衣類を二人分要求し、衣類に関しては男女の物をワンセットである事を伊丹に話す。

「脳内彼氏を飼っているとか?」

伊丹の答えに、黒川はカトー導師にも相談したらしく、エルフの生

活は解らないとの返答を貰ったと告げた後、彼女なりの考えを話す。「もしかしてなんですが、亡くなつた家族がある期間は居る者として生活していたりするのではないかと……………」

憶測の域を出ない黒川の答えに伊丹が応える。

「うーん、俺からも彼女に聴いてみるよ。よく話し合つてみる必要がありそうだね」

するとその場に桑原曹長が顔を出す。

「隊長、そろそろ出発時間です」

「あらっ、もうそんな時間？ 鱗の売買ついでに彼女達を乗せて偵察にも出るから、時間があれば俺からも聴いてみるよ」

アルヌスの丘の偵察及び敵の掃討を命じられているピニヤは、寄つた街で連合諸王国軍を指揮した王が街道外れの修道院で怪我の治療をしているとの話を聞きその修道院に向かう。

そこは決して大きくはない、小さな地方の修道院であった。

ピニヤはこの門を叩き修道院長に話をし、件の人物に会わせて貰う。

修道院のベッドには片側の手足を無くした顔を見知つたデュラン藩王国のデュラン王が寝かされている。

「デュ、デュラン陛下！ 直ぐに帝国の医師を呼びます！」

デュランは修道僧に支えられ上体を起こし話し出す。

「これは姫君、儂はこの様な姿ゆえもう長くは有りますまい。それに帝国の世話にはならぬ」

デュランはピニヤに連合諸王国軍と自衛隊との戦いを話し、約束を違えた帝国皇帝に対しての不満を口にする。

「妾も帝国軍が敗れたことは聞き及んでいましたが、どの様な敵が居るのか連合諸王国軍に伝えていなかったとは……………」

「帝国は自らに刃を向ける恐れのある連合諸王国軍を敵の力を以て壊滅させたのだぞ！ 儂は悟つたのじゃ。敵はアルヌスの丘に屯する者共ではなく、背後の帝国である」と！

「陛下、せめてどの様な敵か教えて下さいませぬか!？」

ピニャは帝国軍と連合諸王国軍を破った敵の情報を得ようとデュランに問い質すも、彼は有益な情報をピニャに渡すつもりも義理も無い。

「ふんっ、教えてやらぬ。知りたくば姫自ら丘へ行くがよい。但し姫よ、肝に銘じられよ。アルヌスの敵は帝国より強い神のごとき軍!自ら呼び込んだ敵に帝国は敗れるであろう!」

これ以上デュランから情報を聴き出せ無いと判断したピニャは、アルヌスの丘の惨状を自らの目で確認すべく数騎の手勢を連れ、イタリカ経由でアルヌスの丘に向かう事にした。

そんなピニャの元にイタリカが軍勢に攻められそうであるとの報告が入る。

「異世界の軍か!? グレイ、ノーマ、ハミルトン! 妾達は先行してイタリカに行くぞ! 付いて参れ!!」

彼女は配下の薔薇騎士団にイタリカに向かう様に使者を遣わし、一行は騎馬をイタリカへと向け先行偵察の為、急行するのである。

イタリカ——そこは帝国内のフォルマル伯爵領の地方都市でテッサリア街道とアツピア街道の交差に位置している為、交易に富み、しかも広い平野は帝国の穀倉地としても重要な場所である。

イタリカに着いたピニャは目を見張った。

ここを攻め込もうとしているのは連合諸王国軍の敗残兵が野盗と化した武装盗賊集団であり、異世界の軍ではなかったからである。

それでもピニャは伯爵家に赴き、身分を明かしイタリカの守備隊と合流し指揮を執り、野盗の攻撃を何とか撃退していた。

しかしアルヌスの城塞都市は盗賊集団からの攻撃で無惨な姿となっていた。

ピニャは部下達の安否を確認した後、民兵達に各所破損箇所を修理と交代で休みを取らせるように命じて自身はフォルマル伯爵邸へ入り込む。

ピニヤはメイド長に食事の用意をさせ、出されたものを平らげると一眠りすると言い、客間での睡眠をとるのだが、急用の折りには水を掛けてでも起こせて言い伝える。

ピニヤは客間のベッドの中で一日を振り返る。戦力にならないの程の数少ない正規兵、勇敢な民兵程早死にをしていく現実。まさにこれが皇女ピニヤの初陣であった。

そんなうつらうつらしているピニヤに一気に現実に戻す冷水が浴びせ掛けられる。

「何事か!? 敵襲か!？」

そこにはニンマリと笑みを浮かべながらバケツを持つメイド長がおり、慌てて飛び起きるピニヤに侍従のグレイが話し出す。

「さあて、敵なのか味方なのか………皇女殿下にご確認して頂きました
く———」

言い淀むグレイを尻目に、身支度を整えたピニヤは急ぎ屋敷の外に出て、城壁の扉の覗き窓を覗き込むのである。

6 よつ、よくぞ参つたな!!……………ん？

伊丹達、第三偵察隊の面々は装備を整え集まり、桑原曹長の号令の下、縦、横、方陣と射撃陣形のチェックを済ませると、各員が三台の車両に分乗し仮設住宅のある避難民キャンプへと寄る。

キャンプに着くと、気さくに声を掛け出す伊丹達を子供を始めとした避難民達が待っていた。

「おじちゃん、この袋を三つお願いします」

子供達一人一人が重たそうに抱えてくる袋を高機動車に積み込み、伊丹や黒川に見よう見真似の敬礼をする。

「おじちゃんは勘弁しれくれよな……………」

「二尉は子供達に慕われていますわね、うふふ」

その後、レイ、テユカ、そしてロウリイが乗り込むと伊丹が見送りの人達に声を掛ける。

「皆さ〜ん、積み忘れはありませんか？ 無い様でしたら出発します」

住人から手を振られての出発となり、三偵はアルヌスの丘から離れテッサリア街道へと合流する。

伊丹が乗る高機動車に居る桑原曹長は、コンパスを乗せた地図を広げ絶えず進行ルートを確認しているのだが、レイは等高線が引いてある程の精度の高い地図と、行き先を指し示すと思われるコンパスに興味を持つ。

（ジエイタイは如何にしてこの様な精巧な地図を作ったのか？ それに方角を示すこの道具は……………）

自衛隊の持つアルヌス周辺の地図は、ヘリから撮られた航空写真で起こした地形図である。

コンパスに興味深々のレイに気が付いた桑原が説明をする。

「ん？ これに興味があるのかい？ これはコンパス。コン・パ・ス。この赤い針が北の方角を指すんだよ」

穏やかに教える桑原に、レイは直ぐにでも覚えようと復唱をする。

「コンパス。キタ。コンパスはキタの方角を示す物」

車内ミラー越しに桑原とレレイのやり取りを見た運転手の倉田が伊丹にぼやき始める。

「隊長、なんすつかねえ。あの鬼軍曹の桑原曹長おやっさんが孫みたいな女の子相手に顔を崩しちやつて！ 陸曹候補生の頃、死ぬ程ハイポート走させられたのに……………」

暫く街道を走っていると前方に煙が上がっているのを伊丹と倉田が確認する。

「隊長！ 前方に煙です」

「やだなあ、あの煙。この道の先だよねえ？ 煙の上がついている方向かうの二度目だろ？ 悪い予感しかしないんだけど……………」

伊丹は全車に停止を命じて地図を見ている桑原曹長に確認をとると、煙が上がっている方向にイタリカがあると桑原は答えを返す。

伊丹はレレイに双眼鏡を渡し、煙を確認させ問い掛ける。

「あの煙は何だと思う？」

レレイは覚えた日本語で、たどたどしく答える。

「今は煙を焼く、季節、違う。恐らくかぎ」

『かぎ』じゃなくて『火事』だね」

レレイの言葉の訂正をした伊丹は、自分の乗る車内の皆と、無線で各車両に指示を出す。

「周囲の警戒を厳にしろ！ 対空警戒は怠るな！」

するとロウリイが伊丹と倉田の間に上体を割り込ませ、妖艶な笑みを浮かべ呟く。

「血の臭い」

まずはイタリカの状況を知る事が先決で有ると判断した伊丹は、同乗しているメデイアに声を掛ける。

「メデイア。使い魔をイタリカに放って様子を見てくれないか？」

「お安い御用ですわ、耀司様。なんなら私が直接飛んで行って差し上げますわ」

「メデイアも霊体化出来る訳じゃ無いから、目立つから駄目だよ」

するとメディアは掌に一匹の蝶を出し、車外へと放つ。

それを見ていたレレイを始めとした皆が驚きの声を上げ、レレイがメディアに尋ねる。

「メディア。それは何でどんな働きをするのか？」

「あくら可愛い賢者さん。興味がお有りの様ね。これは私の使い魔でね、これが見たり聞いたりした物が私や耀司様の頭に入ってくるのよ」

他の隊員達は単純に手品の様だと驚くばかりであるが、レレイは今まで出会った事の無いメディアの魔術にひたすら驚いている。

（こんな魔法もあるのか！ お師匠様に知らせなくては！）

伊丹は無線で各車両に指示を出す。

「さてと、イタリカに向けて出発だ！」

メディアの使い魔からの情報で、イタリカの城塞都市が、謎の武装集団に襲われ南門側は軽微な損傷。しかもアルヌスの兵を束ねているのは、身分の高そうな女性だと云う事も判明した。

「ねえ、レレイ。危険な所にこの人達を巻き込むのは止めたら？」

テユカは伊丹を始めとした自衛官達の身を心配するが、レレイはそのままイタリカの街に入ると言い出す。

「こちらやジエイタイが敵では無い事も解らせねばならない」

イタリカの城壁にある入り口から少し距離を取り、各車両が停止をする。

すると城塞の上から弩を向けて大声で誰何をしてくる者が居る。

「何者だ！ 敵では無いのなら姿を現せ！」

物騒な交戦域にテユカが心配をする。

「レレイ、やっぱり止めましょうよ！」

レレイはそんなテユカの心配を無用とばかりに拒み、車外へと出ようとする。

「私一人で行っても用件は済ませられる」

「レレイったら！ 矢避けの魔法を掛けるから待ちなさい！」

テユカはレレイに矢避けの精霊魔法を掛けると一緒に車外に出る。するとロウリイまで一緒に車外に出始める。

「あくらあ、二人で何をこそこそしようとしているのかしらあ。面白そうだから私も行くわあ」

流石に女性三人だけで交戦域の街中に入らせる訳にも行かず、伊丹も慌てて彼女達に付いて行く。

「女、子供だけで行かせる訳にもいかないよなあ。桑原曹長おやっさん、後は頼みます」

そんな伊丹の行動に、ギルガメツシュが声を上げる。

「あつー！ 伊丹さん!! メデイアさんはここで待っていて下さい。我が伊丹さんの警護をします」

いつの間にか金ピカの鎧を着込んでいたギルガメツシュがメデイアに話すと、彼女は伊丹の身の安全を彼に託した。

「ギル、耀司様を守って頂戴。しかし、いつ着替えたの?」

レレイを先頭に、テユカ、ロウリイ、ギルガメツシュ、伊丹がゆつくりと歩き出し、城門へと近付く。

ピニヤは城門の覗き窓から、こちらに向かって来るリンドン派の杖を携えた魔導師、精霊魔法使いのエルフ、黒ゴスの神官、きらびやかに輝く金鎧を確認する。

（何なんだ、あの一団は!? リンドン派の魔導師にエルフだと!

あれは!? ロツ、ロウリイ聖下か!? 間違いない! 確かに死神ロウリイだ! 何故ここに居る!? それに金ピカだと? 敵なのか、味方なのか……………)

ピニヤの配下のグレイも、彼女の肩越しに覗き窓の外の光景を目にする。

「何でしようなあ、あの一団は。魔導師、エルフ、幼いエムロイ教の神官見習いでしょうか? それにあの目立つ鎧の者——」

「あのエムロイ教のは神官見習いではなく、亜神の死神ロウリイだ! 見てくれは幼いが、齢九百を越えているのだぞ!」

グレイも死神ロウリイの名前こそは聞いてはいたが、見るからに十代前半の年格好とは想像してはならず、そのギャップに驚く。

「幼子の様な者があの死神ロウリイだとは……………見た目はここのご当主のミュイ様と大差は御座いませんな。しかし何故にまた、ここに居らしたのか……………」

「ふんっ、神の行いなど気紛れだからな。それに、大体神官などが口にする天啓だの、神のお言葉だとか、結局は神の名を借りた神官自身の言葉ではないか！ 本当に神からの言葉かどうかも怪しいぞ！」

グレイは不穏当なピニヤの宗教発言に耳を塞ぎながら、彼女の今の話と自分が無関係であることを主張し出す。

「あー！… あー！… 姫様、小官は何も聞いてはおりませんぞ！あー！…」

ピニヤはこちらに向かって来る一団と、攻め込まれイタリカの兵の士気も下がって来ている現状に考えを巡らす。

（この一団は敵なのか、味方なのか、城内に招き入れて良いのか、悪いのか……………しかし妾にはもう兵達の士気を上げる術はない。全ては妾の決断に掛かっているのか！ ええいつ、ままよ!!）

遂に意を決したピニヤは、勢い良く扉を開け放つ。

「よっ、よくぞ参ったな!!……………ん？」

鈍い衝撃音と共に開け放たれた入り口には、気を失っている斑服を着た男が仰向けに倒れている。

予想外の出来事に、ピニヤは倒れている男と一緒に倒れた一団の者達に確認をする。

「わっ、妾か？」

レレイ、テユカ、そしてロウリイが頷くが、ギルガメッシュがピニヤと倒れた伊丹の間に立ち言い放つ。

「伊丹さんへの仕打ち、万死に値すると思え。雑種」

「わっ、妾の所為か……………」

「雑種以外に居るまい」

ギルガメッシュが空間から一振りの剣を取り出すと、グレイや周囲の兵達がギルガメッシュに剣を構える。

「姫様！ 早くそこからお退き下さい！」

（ギル、ここで事を荒立てては駄目よ。こんな連中は私が一撃で消し炭に出来るから、先ずは耀司様の容態を見て差し上げて）

メデアアからの念話を受けたギルガメツシュが空を見上げると、ローブを拵げ円環を纏ったメデアアが、蝶の様に既に浮遊している。

（メデアアさん、いつの間にな!?）

（耀司様とのパスの繋がりは伊達ではなくってよ。いきなり音信が途絶えたら、流石の私も直ぐに動くつてもよ）

（そう云えば、冬木で我が伊丹さんを待ち伏せした時も、直ぐに現れましたよね）

突然、聖杯戦争の頃の話をしだしたギルガメツシュの言葉に、必死で身を挺した事を思い出し、顔を朱らめるメデアア。

（ちよ、ちよつとギル！ 照れるから止めてくれるかしら）

テユカは伊丹の腰から水筒を取り出し、彼の顔に水をジャバジャバと掛けながらピニャに怒鳴り出す。

「貴女バカじゃないの!? 扉の前に誰か立っているとか考えないの！」

ゴブリン以下よ!!」

ギルガメツシュは、ロウリイに膝枕をされている伊丹の頬を軽くペシペシ叩く。

「伊丹さん！ 伊丹さん！」

程無くして意識を取り戻した伊丹は、小隊無線から呼び続けている桑原曹長に胸元のプレストークスイッチを押して答える。

「桑原曹長おやつさん、申し訳ない。少し気を失っていたみたいだ。それにギル、有り難う」

『二尉の意識の戻りがもう少し遅かったら、メデアアさんに因ってイタリカが消滅していたかもしれませんよ』

「えっ?」

伊丹が空を見上げると、そこには今にも上空から光線を出しそうなメデアアが浮遊しているのが目に入った。

伊丹は慌てて飛び起き、空のメデアアに向かい大きく手を振り大声で叫び、念話で話し出す。

「おーい！ メディア！ 俺は大丈夫だから、物騒な真似は止めてくれよなー！」

（心配掛けて済まなかったな。上空に使い魔を残して降りて来てくれないか）

「耀司さまあゝ！ 只今そちらへと降り立ちますわあゝ！」

（嗚呼、耀司様。ご無事で何よりでしたわ）

空に浮遊しているメディアを見つけたピニヤを始めとした街の住人達が腰を抜かさんばかりに驚く。

「ひっいいい！ 翼竜を使わずに人が空を飛んでいる！」

メディアは伊丹の呼び掛けに応え、彼の傍にフワリと降り立つと、驚くピニヤを睨み口を開いた。

「お嬢さん、耀司様がご無事で何よりでしたわね。怪我でもなさっていたら、この街が差し詰め死街地（しがいち）になっていたところよ。おーいほほほっ！」

降り立って直ぐに物騒な物言いをすりメディアを伊丹は宥める。

「メディア、俺は何ともないから大丈夫なだけど」

と、伊丹は言いながらピニヤに視線を移し話を繋ぐ。

「何で俺はこんな目にあつたのか、その張本人から事情を聞きたい！」
すると周囲の者達の視線がピニヤへと集まる。

「やはり妾なのか!？」

流星のグレイもため息混じりに答える。

「姫様以外におりましようや？」

ピニヤも皇女と云う立場上、軽々しく頭を下げ謝る訳にもいかない。

しかも目の前に居るのは、緑の斑服を着ている。もしかしたら、これが噂の緑の人かも知れないと考え、一際大きな声を上げて伊丹一行の到着を知らせる。

「みつ、皆の者！ 妾の言葉をよく聞くがよい！ あの緑の人々が援軍に馳せ参じたぞ!!」

（さあ、皆の者！ 大声を上げて歓待せよ！ さすれば妾も頭を下げずに済む……………だろう）

ピニヤの一言に一番驚いたのが伊丹である。自分が打ちのめされた事情を聴こうとしたら、いつの間にかイタリカを救う援軍にされてしまったのである。

「ちよつと待ってくだ——」

伊丹の抗議の声を掻き消さんばかりのどよめきと歓喜の音が辺りから沸き上がる。

炎龍を撃退した強者達、魔導師、精霊魔法の使い手、それに使徒が揃っているのだから負ける気がしないと感じ始めた兵や市民達。ここに来て、兵達の士気も一気に高まった。

それとは対照的に、置かれた現実に嫌な予感しかしない伊丹。

(商取引の護衛と偵察の筈だったのに、何でこうなるんだ……………巻き込まれた……………)

こうしてピニヤは、計らずも伊丹達、緑の人を味方に引き入れてしまふのであった。

7 これが……これが妾の初陣だと云うのか……

イタリカのフォルマル伯爵邸の広間で、拡げられた街の地図を挟んで相対するピニヤ達と伊丹達が話し込む。

何故か援軍としてピニヤの指揮下に置かれ、守備をする門まで指示をされる伊丹。

(こんな筈じゃ無かったんだが……)

事の発端は、アルヌス協同生活組合のイタリカでの商取引の護衛と偵察の為であったが、城塞入り口で伊丹が打ちのめされてから、何故か援軍として迎えられピニヤの指揮下に入れられてしまっていた。

ピニヤは街の地図の南門をトントンと指で示し、ここを守備せよと、彼女の地位に相応しく、かなりの上から目線で伊丹に指示を出す。

このピニヤの慇懃無礼な態度に我慢がならないメデイアは、ピニヤ側の人間全てを潰してしまおうかと一瞬考えがよぎるのだが、流石にそれは伊丹の感じ知るところとなり、たしなめられる。

(こらあ、メデイア。今物騒な事を考えただろう)

(ですが耀司さまあゝ。あのいけ好かない女には、どうにも我慢の限界を試されている様でイラつきますわ)

自衛隊は城壁上からの守備で、万が一、城壁を破られ侵入を許した場合に備え、城門内部には市街地への侵入を阻止する為の柵で囲まれている。勿論、城門内部の柵の守備はイタリカの兵や民兵達である。

ピニヤとの打ち合わせを済ませた伊丹達が、指定されたイタリカの南門の城壁に登り陣をとる。

以前の武装集団からの襲撃では、なんとか撃退に成功はしたが、城門は破壊され、簡素な応急処置が施されているだけの南門と修復中の防柵。

そんな充分ではない南門の状態を目の当たりにしたメデイアが、眉をしかめて伊丹に話し出す。

「耀司様、随分と貧相な防御陣ですわね。私達にこんな所を振り分けるとは失礼にも程がありますわ。まあ、私一人でも十分撃退は出来ますけど」

「ああ、頼りにしているぞ。メデイア」

「耀司様のそのお言葉一つが、私の魔力を増大させますのよ！ 嗚呼、耀司様達が勝ち残る姿しか想像できませんわ！ でもあのいけ好かない姫は、血を流して倒れているのですけどね」

伊丹とメデイアの会話に入り出すギルガメツシュ。

「しかし本当にこんな場所の守備で良かったのですか？」

「ん？ 良いも悪いもメデイアとギルが居るから安心はしていられる。恐らく南門に関して言えば自衛隊が交戦しなくても、全てがメデイアとギルの活躍で済んでしまうかもな。ただ……」

奥歯に物が挟まった様な物言いをする伊丹に、ギルガメツシュが問い掛ける。

「ただ、何でしょうか？」

「それは敵がこちらに攻めてきた時の話だ。なにも敵が南門をもう一度攻めますよ〜とは言っただけではない訳だから、他の門に攻撃が集中されると厄介なんだよ」

使い魔を飛ばしているキャスターから、敵の本隊の人員は凡そ七百人である事を知らされ、更に数騎の騎兵が斥候で南門側に広がる平地を駆けるのも目視で確認がされた。

そんな城門と内部の防柵を城壁の上から眺める伊丹は、桑原曹長に意見を求める。

「桑原曹長、この配置、どう思う？」

「いやあ、明らかに数少ない我々を囮に見せて、敵をこちらに誘導して一次防衛戦の城壁で敵勢力を減らした後、城門内で殲滅させる様には見えませんか」

「やっぱりそう見えるよね。我々はメデイアとギルを含め十四人。明らかに手薄さを敵に見せているよなあ。体の良い捨て駒にしたい訳

かな……フツ」

伊丹は、ピニヤの考える一次防衛戦と二次防衛戦を敷く戦い方自体は納得するが、自衛隊を囿にする考え方に思わず嘖き出してしまい、それを桑原は見逃さなかった。

「どうしました二尉？ なにかおかしかったのですか？」

「いや何ね、あの姫様は門が破られる事を前提に我々を配置したけど、この南門に敵が押し寄せても陥落する訳がない！ なにせメデアとギルが居るんだからさっ！」

しかし伊丹はピニヤの配置に幾ばくかの不満を抱いていた。敵勢力も、イタリカ全てを包囲、攻撃するだけの戦力を有してはおらず、伊丹としては自衛隊を後方に配置し遊軍的に機動力を生かし、敵が殺到した箇所へ駆け付け付ける作戦を取りたかったのだが、指揮権を持つピニヤの云う通の配置に従いはした。

「緑の人って事で皆の士気が上がっているのに、後方で待機じゃ期待に沿えない部分も有るって事かな……」

イタリカ全ての民が、緑の人である自衛隊、魔導師、精霊使いのエルフ、そして使徒までが居る事に安心をし、士気も高まっている。そんな市民の期待を伊丹は肌で感じていた。

伊丹は各隊員に土嚢作りや暗視装置の配付、篝火などの灯りの撤去の指示を出し、与えられた南門の守備に備え、特地方面派遣部隊本部に状況を報せ、支援要請をする。

メデアやギルガメッシュは自衛隊の在り方を理解している為、伊丹の指示に従い、他の隊員達と共に動き回っているが、ロウリイには自衛隊が、敵国である帝国の皇女ピニヤを助けようとしているのか解らない。

「ねえ、イタミィ。どうして敵であるあのいけ好かない姫を助けるのお？」

伊丹はロウリイの問い掛けに、当たり前前の事を答える。

「ん？ 街の人々を助けるだけだよ」

この特地では今まで無かった発想に、ロウリイは伊丹の真意を探る。

「貴方あ、それ本気で言っているのかしらあ？」

「ああ、そうなっている筈だけどな。その為の自衛隊だよ。ロウリイは俺達が戦う理由が気になるのか？」

（あれっ？ こっちの言葉がすんなり耳に入る！ イタリカに入る時に顎を打ったからかな）

「そうねえ、エムロイは戦いの神で、人を殺めることを否定している訳ではないのよお。只、動機が重要なもの。殺める動機に嘘、偽りがあれば、魂を汚す事になるわあ」

「この街の住人を守るってのは、本当の事だ。あともう一つの原因としては、自衛隊と仲良くした方が良いつてあの姫様に解つて貰う為さ」

ロウリイは伊丹からの答えを、ピニヤに圧倒的な強さを見せ付け、恐怖を刻み込み平伏せさせる為だと曲解して捉え、それならば、その考え方もアリだとピニヤの恐れおののく姿を想像し狂喜乱舞する。

「気に入ったわあ！ 貴方のその考え、気に入ったわあ！ それなら私も協力は惜しまないわあ！」

ロウリイはヒラヒラと舞い、スカートの手端を掴まみ伊丹に一礼をしてみせる。

陸上自衛隊特地方面派遣部隊本部に衝撃が走る。

伊丹率いる第三偵察隊からの援軍要請があつたと知れ渡り、佐官級の部隊長が集まり激論が交わされていた。

特に激しく言い合っていたのは第一戦闘団の加茂一佐と第四戦闘団の健軍一佐である。

「陸将、是非わが第一戦闘団を派遣して下さい。既に隊員達の待機は済ませてあります！」

「加茂お、何言つてんだ?! 陸の上をチンタラ進む訳にもいかんだろ！ その点うちは空をひとつ翔び！ 陸将、援軍要請には是非わが第四戦闘団を！」

施設建設の為、汗を流し暇無く働いている施設科や、伊丹達の深部

偵察隊が所属する、防衛戦を担う第五戦闘団は何度か帝国軍と交戦しており、その隊員達の手柄話を聞かされる度に、訓練に明け暮れていた第一、第四戦闘団は肩身の狭い思いをしてきた。

そしていよいよ自分達にも出番が来たのだと、加茂や健軍が名乗りを挙げ出したのである。

第一戦闘団は混成の打撃部隊。第四戦闘団はヘリによる空中機動部隊。

緊急を要する援軍である為、狭間は健軍一佐率いる第四戦闘団に援軍の指示を出した。

そんな健軍一佐は部下の用賀二佐に問い質す。

「例の物はどうなんだ？」

「はっ！ ヘリにコンポとスピーカーを搭載済みです。勿論、ワルシャワ・フィルのワーグナーもです」

「パーフェクトだ、用賀」

嬉々とする健軍一佐らの行動に、狭間陸将は思わず眉間に皺を寄せ、海辺のベトコン陣地をヘリで強襲する映画の一場面を思い浮かべる。

日が沈んだイタリカを照らす物は、南門以外の城塞内の篝火だけである。

「メデイア、盗賊団の位置は解る？」

使い魔を常に張り付かせている為、伊丹からの問い掛けにも即答するメデイア。

「昼間はイタリカの南に居りましたが、この夜の暗闇に乗じて東側に陣を移しつつあるようですわ」

伊丹はメデイアの報告で、南門が戦場となる可能性が大幅に下がる事が解りホッとす。

「おやっさん、盗賊団は東門に夜襲を掛けるみたいだ」

「まあ、こちらとしましては一安心ですが、盗賊団とは云え元は正規兵。東門が持ち堪えられるか些か心配ではありますね」

「そうだよねえ、東門が落ちたとばっちりを受けたくはないしなあゝ。一応、姫様には警告をしておくか」

伊丹はメデイアの使い魔一匹をフォルマル邸のピニヤ居る部屋に飛ばし語り掛ける。

『皇女殿下?』

「ん? ひいひい〜!」

自分しかいない部屋の、彼女の耳元から突然語り掛けられたピニヤは、思わず声を上げてしまった。

『姫様、驚かないで下さい。南門を守っている自衛隊隊長の伊丹です。これも我々の魔導のひとつです』

「しっ、失礼な! 妾は別に驚いてなど居らぬぞ!」

(ジエイタイとはこの様な魔導も使うのか!?)

『どうやら盗賊団はイタリカの東側に移動している模様です。恐らくは東門に夜襲を掛けると思われます。ご注意下さい』

「なにつ! 東門だど!? そっ、そんな事は妾は既に解っておる、解っておるのだぞ。斥候からもその様な報せが届いておるわ……」

(なんと東門だど! しかし何故ジエイタイは解った? こんな暗闇でもお見通しと云うことか!)

『ご存知でしたか。では失礼します』

(あらら、姫様は随分と見栄っ張りだな。全く素直じゃないな)

使い魔を通したピニヤとのやり取りを終えたとみた桑原曹長は、伊丹に問い掛ける。

「あちらの姫様の対応は如何でしたか?」

「姫様は、盗賊団が東に移動していたのは知らなかったみたいだよ。でも『そんな事は妾も知っておる!』とか言っちゃってさ、素直じゃないんだから。警告はしたから、あとは姫様がどうするかだね」

伊丹からの警告を受けたピニヤは、色々と考えを巡らしていた。

(ジエイタイのイタミから情報を得たが、本当に信じて良いものなのか? 噂の緑の人らしいが、盗賊団と内通し、実は西側から攻撃を

掛けるなどとは考えられぬか？ 兵力を西門から東門に移すか、それともこのままの布陣で迎え撃つか……)

結局ピニヤは考えを纏める事ができず、伊丹からの警告を無視する形でイタリカの各門に均等に兵力を分けたままだった。

ピニヤに様子を伝えてから、城塞内の兵の動きをメデイアの使い魔を通して見ていた伊丹だが、動きが全く無い事が解り肩を落とす。

「俺達って信用されて無いんだな。こうも無視されると悲しくなるよ」

呟く伊丹にメデイアが優しく語り掛ける。

「良いではございませんか。私達はやれることをしました。あとの責任はあの姫様が負うだけですよ」

伊丹とメデイアの会話にロウリイとレレイが加わる。

「そうよお、ジエイタイが全てを背負っているみたいなきえは止めなさいよお」

「ジエイタイは成すべき事をした。あとは皇女の仕事」

「そうですねよ、二尉。我々は南側の守備を任されていますから、それ以上は手が出せません。お気を落とさずに」

桑原曹長からも慰められ、隊員達の士気が下がる事も考え、伊丹は皆に声を掛ける。

「なあ、皆。そう云う状況だけど、俺達は俺達にしか出来ない事をしような！ さあ皆。気を張ってくれよ！」

皆を叱咤激励する伊丹だが、栗林が伊丹に聴こえる様にボソリと呟く。

「隊長が一番緊張感がないよ」

「くっ、クリぼう……」

伊丹達がイタリカ南側の無人の平原を見張ること暫し、東門付近から火の手が上がる。

時刻は午前三時。メディアが確認した通り、盗賊集団はイタリカの東側に陣を張り、東門に火矢を放ち殺到しだした。その戦い方は陽動等の作戦すらない、数に物を言わせた力押しである。

フォルマル邸の客間で仮眠を取っていたピニヤの元に東門に敵襲来の報せが届く。

「南門ではなく、東門だ?!」

(ジエイタイの報告通りではないか!)

ピニヤは身支度を済ませ、指揮をとるため急ぎ騎馬で東門へと向かう。

敵集団は盾や鎧の形がバラバラの、まさに破れ去った連合諸王国軍の敗残兵の寄せ集めであるが、その戦い振りには、戦いすらさせて貰えず一方的に破れた兵達の無念を晴らし、ぶつけるかの様である。

そんな盗賊集団は一つになり、イタリカの東側の城門に攻撃を仕掛けてくる。

城壁を登る為の梯子を盾で頭を庇う亀甲陣で持ち運ぶ隊が幾つもあり、城塞守備側は、焼け溶けた鉛や油や熱湯、そして大きな石をそんな亀甲陣の敵の上に投げ掛ける。

次第に城壁には何本もの梯子が掛けられ、敵集団は地面から湧き出す様に次々と梯子を登り始める。

守備隊の抗戦に幾つかの梯子が城壁から倒され、よじ登る敵兵に矢や石を当て、それらの直撃を受けた兵が、後から付いて登り来る兵を巻き込みながら落下していく。

にも関わらず、城壁に架かる梯子は増え、盗賊集団は城壁上部に辿り着き、辺りの守備兵に斬りかかる。

城壁で指揮を執っていたノーマも剣を振り奮戦するが、城壁に登ってきた多数の敵に吞まれ遂に倒されてしまう。

「何故だ!? 何故誰も助けに来ないんだ!?!」

「俺達は捨て駒なんだよ!!」

「緑の人達は来てくれないのか!？」

城壁が敵に攻め込まれイタリカの守備兵が倒されているにも関わらず、城門内の広場に敷かれた第二次防衛戦の防護柵を守る兵は助けに向かわない。防護柵に居る兵達こそが敵を殲滅させる戦力であり、下手に城壁守備隊の補充には充てられないのである。

東門に駆け付け、この状況を見たピニヤは守備隊の脆さに愕然とする。

「ジエイタイが来て士気も揚がっていた筈だが、これほどに脆いとは……」

ピニヤは敵に呑まれた城壁にノーマの姿が無いことに気が付く。

「ノーマはどうした!？」

「恐らくは討ち死にされたかと……」

ピニヤは部下であるノーマの討ち死にと云う事態に、動揺の色を隠せないでいる。

(……これが……これが妾の初陣だと云うのか……)

暗闇の城壁の上、伊丹達は明るくなった街の東側を見る。

「0300、夜襲を掛けるには絶好の時間ですな」
まろさんまるまる

腕時計を見ながら誰に聞かせるでもなく呟く桑原曹長。

伊丹はメデイアの使い魔を通した映像を観て、東門の陥落が時間の問題である事が解る。

「東門から応援要請はまだ来ないか?」

桑原曹長は伊丹の問い掛けに、首を横に振り答える。

「生憎まだ来てはいません」

東門への襲撃を知ったロウリイは地団駄を踏み悔しがる。

「あーっ! ……なんでこっちじゃなく、東門なのよおー!」

地団駄を踏んでいたロウリイは、ハルバートを振り暴れだし、終いには艶かしく腰を振り始める。

「はあ、はあ、はああ、嗚呼……おかしくなっちゃわあ!」

ロウリイの異様な行動を止めに掛かろうとした伊丹をレイが止

めに入る。

「今、手を出すのは危険。あの行動は、彼女自身も止められない衝動。敵と認識した者を殺す。戦いで落とした魂が彼女の身体を通して主神たるエムロイの元に行く。それは彼女にとり媚薬と同じ」

ロウリイは顔を紅潮させ、喘ぎ声を上げ、身体を艶っぽくくねらせ
ては、積んだ土嚢や城壁を壊し暴れまわる。

使い魔を通して視た東門が、これ以上保たない事、そしてロウリイの喘ぎ振りは男性隊員の士気に関わりと判断した伊丹は、彼女を栗林と共に戦場に送りだす事を決断した。

「栗林っ。ロウリイに付いてやってくれ！ それと富田二等陸曹とメ
ディアとギルと俺の六人が東門に行く。おやっさん、後は宜しく」

「畏まりました、二尉！」

伊丹から指示をされたメディアは、畏まりましたと言いつつ、ヒラ
リと舞い上がり高度をとり、東門外側を目指し飛んでいく。

（取り敢えず、城門外側の集団を軒並み焼き払ってしまおうかしら
）

栗林が踞るロウリイに近付き声を掛け様とした途端、ロウリイは我
慢の限界だったのか、ハルバートを掴むと城壁から飛び降り、家屋の
屋根を伝い東門に向かい跳んで行く。

「ギルッ！ ロウリイを追って援護してやってくれ！」

伊丹の指示でロウリイを追いかけるギルカメツシュを伊丹、富田そ
して栗林が高機動車に乗り込み先行した二人を追いかけて出す。